
メッセージ

けせら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メッセージ

【Nコード】

N2121BA

【作者名】

けせら

【あらすじ】

浅川圭吾はある日、徳永香織という死者のメッセージを受け取ることが出来る女性と知り合う。興味を持ち、香織の力について調べ始める浅川だったが、やがて、香織が受け取るメッセージにより殺人事件に巻き込まれていく。

プロローグ

プロローグ

それを初めて認識したのは私が小学校2年の時だった。

朝、起きて庭を眺めた私の目に飛び込んできたのは、隣の家のおばあちゃんが静かに優しく微笑みながらゆっくりと透明な階段をあがっていく姿だった。

それが何を意味しているか私にはすぐにはわからなかったが、昼過ぎに学校から帰ってきておばあちゃんが死んだことを聞き、初めて私が見たものが何だったのかを知ることになった。そして、私は本能的にそれを誰にも喋らないほうがいいと思った。

思えばそれまでも何度か同じようなものを見た記憶があった。

だが、それまではそれが何なのかハッキリと気づけなかった。

それからは頻繁にそういう人々の姿に気づくようになった。しかも、それは死者だけではなく。私をじっと見つめる私自身の姿もあったし、絵のなかから抜け出てきたような人間とは思えない異形の姿の者もいた。何か意味不明の言葉を喋る男、まったく口を開こうとせず私をじっと見つめる女の姿もあった。中にはまったく自分が死んでいることに気づかず生活を送る者さえ存在していた。

どうして私がそんなものを見ることが出来るのか、そして、どうしてその者たちが私の前に姿を現すのか、私には到底理解することが出来なかった。

中学、高校と進むにつれて、その者たちが私の前に現れる頻度は増えていった。私はいつもそんな光景を横目で見ながら毎日を暮らしていた。

そんな時、私は彼に出会った。

大学からの帰り道、私は交差点の向こうに佇んでいる小学生くらいの少年の姿を見つめていた。すぐ傍には大きくひしゃげた自転車

と、それに押し掛かるような形で大型トラックが止まっていて、そこを数人の警察官が現場検証をしている。離れていてもアスファルトに大きく広がった血の跡がはっきりと見てとれる。

黒いジーンズに青いトレーナー姿の少年は無言のままにその場に蹲り、じっとそのひしゃげた自転車を見つめている。寂しそうな眼差し、そして、悔しそうに結んだ唇。だが、警察官も周囲を囲む野次馬たちも、誰もその少年の存在に気づきもしない。

（ああ……そうか）

私はその少年が事故で死んだのだと気づいた。誰もあの少年に気づくはずもない。あの少年は他の人たちに見えるはずもない。

「事故かあ」

その声に私ははっとして振り返った。

一人の男が立っていた。ベージュのズボンを履き、白いワイシャツに濃いブルーのネクタイをしている。キャラメル色の鞆を右手に持ち、左手にはジャケットを持っている。ワイシャツの袖を捲くつているため、右手の手首に包帯をされているのが見えた。

事故を見つめるその男の横顔はどこか物悲しく感じられた。

その男は私へ向き直ると、さも珍しそうな表情で私の顔を見た。

「ねえ、何が見えるの？」

男は私に顔を向けると訊いた。

「え……何って？」

「その君の視線の先に何が見えるの？　ただ事故を見ているように思えないんだけど」

私に向かって彼はもう一度訊いた。

「いえ……何も……」

私は首を振った。言っても信じられるはずもない。

「そうかな？　君の視線は僕たちの目にはとらえられないものを見ているように思えたんだけど」

「どうして？」

私は驚いて彼の顔を見た。

「その顔はやっぱり当たりだね？」

彼は嬉しそうに笑った。

「ひよつとしてあなたにも見えるんですか？」

「いや、残念だけど僕には見ることが出来ないよ。けど、君の表情からそこに平凡な人間には見ることの出来ないものが見えるんじゃないかって気がしたんだ」

彼は『平凡な人間』という言い方をした。『普通の人間』ではなく『平凡な人間』。その言葉が新鮮だった。

「あなたは誰ですか？」

「僕は浅川圭吾。高校の教師をしてる」

「先生？」

その姿はあまり教師らしくは見えない。

「……あ、いや……実を言うと、ついさっき辞めてきたとこだから……本当は無職ってことになるかな」

浅川はそう言うって頭を掻きながら笑った。「まあ、もともと特別なりたかったわけでもないし、辞めるにはちょうど良かったんだけどね」

「はあ……」

私には彼が何を言っているのか理解できなかった。

「それで——？ 何が見えるの？」

穏やかな笑顔で浅川さんは私に訊いた。

不思議と警戒感が沸いてこない。

（話してみてもいいかもしれない）

そんなふう思ったのは生まれて初めてのことだった。私は本能的に浅川さんを信じられる存在だと感じ取った。

私は彼にその少年のことを話した。彼は私の話を聞きながら、まるで想像しようとするかのようにその少年がいる方向をじっと見つめていた。

事故現場には一台のパトカーが到着し、そこからスーツ姿の若い男が姿を現した。慌てたように事故現場に走りよる。おそらく死ん

だ少年の父親なのだろう。

「君は死んだ人の姿なら全て見る事が出来るの?」

浅川さんの問いかけに私は首を振った。

「その時々です。事故現場であつても見えることは少ないです」

「見える時と見えない時……何が違うんだと思います?」

「……さあ……わかりません」

「ひょっとしたら死んだ人の想いの違いかな?」

「想い?」

「彼は何を伝えたいんでしょう?」

ぼつりと浅川さんが言った。

「どういう意味ですか?」

「君にその姿が見えるということは、死んだ少年の魂がそこに留ま
っているわけでしょ? なぜ、彼の魂はあそこに留まっているんだ
ろう?……誰かに何かを伝えたいことがあるんじゃないかな?」

「さあ……」

私は言葉を濁した。今までそんなことを考えたことはなかった。

(あの子は何か誰かに話したいことでもあるんだろうか)

私は改めて少年の姿を眺めた。

少年は父親の顔をひしゃげた自転車を見ることを止めると、すつ
くと立ち上がり父親がいる方へと近づいていった。もちろん、父親
がそれに気づくことは無い。盛んに警察官と何か話をしている。そ
の傍らで少年がじつとその父親を見詰めている。いや……見つめて
いるというよりも――

(睨んでる?)

その少年の表情には明らかな憎悪の色が浮かんでいる。

「あの子……父親のことを恨んでる……」

ぼつりと私が呟いた瞬間、まるでその声が聞こえたかのように少
年の視線が私に向けられた。

(私を見てる)

思わずその少年から視線を外そうとした。けれど、出来なかった。

少年の瞳のなかに映る何かが私を捕らえて放さない。明らかに私に何かを訴えている。

「言つてごらん。何が見えるの？」

浅川さんが私に言った。

少年はじつと私を見つめている。寂しそうな眼差し、その少年の手がゆつくりと上がった。右手で警察官と話す父親を指差し、そして、左手はパトカーを指差している。

（パトカー？）

あのパトカーのなかには大型トラックの運転手が尋問を受けているはずだ。

「まさか……二人は知り合いなの？」

私の言葉に少年が小さく頷いたような気がした。

「どういうこと？」

私は浅川さんへ顔を向けた。

「あの父親とトラックを運転していた人は知り合いなのかもしれない」

「そう少年が言ってるの？」

「声は聞こえませんが……でも、そんな感じがするんです」

すると浅川さんは右手をそつと額に当てた。そして、ほんの少しの間俯いて何かを考えた後、顔を挙げた。

「わかったよ。僕の知り合いに刑事さんがいる。あとで話をしてみよう」

そう言つてさわやかに微笑んだ。

それが私と彼との出会いだった。

徳永香織 0 - 1

0・徳永香織

目を覚ました時、すでに10時を過ぎていた。

仙台の秋の訪れは早い。9月も末になると、夏もすっかり終わりを告げ、ベッドの中の温もりが妙に心地いい。

浅川圭吾は目覚まし時計をぼんやりと見つめ、今日、入っていた予定を思い出そうとした。

（ああ……そうだ）

しばらく考えてやっと思い出す。

11時にお客がやってくるようになっていたことをやっと浅川は思い出した。浅川はベッドから起き上がると、洗面所で顔を洗ってからパジャマを脱いでジーンズと白いシャツという姿に着替えた。いつもならばスーツを着て、学校で授業をしている時間だというのに、なぜか頭がはつきりしない。

（まるで緊張感がなくなってるな）

浅川はキッチンでインスタントのコーヒーをいれてくると、グレイの布張りのソファにどっかともたれた。苦いコーヒーを口にする
と頭の芯が少しだけしっかりしてくる。

改めて自分が昨日で教師を辞めたことを振り返る。

（5年か……）

その期間が長かったのか短かったのか、それは自分でもよくわからない。そして、その決断が正しかったのかどうかもまだわからない。

差し出された退職届に驚く校長の顔が思い出される。

——なぜですか？ いったいどうしたんです？

そう問われても浅川には答えることが出来なかった。なぜ今になって突然辞めようと思ったのか、自分でもわからない。それでも一

昨日の夜、そうするのが自分の道なのだと、突然に誰かに言われたような気がしたのだ。そして、その考えが脳裏を過ぎった時、浅川は素直にその考えに従うことにした。

生徒たちには何も話もしなかったが、何も問題は無いだろう。受け持っていたのが2年生だったのも幸運だった。3年生ならば、こう簡単に辞めることは出来なかったかもしれない。特別に生徒たちと打ち解けていたわけでも、慕われていたわけでもない。今時、担任が辞めたからといって感傷的になるような生徒がいるとも思えない。辞めた今となっても特別な感情は湧いてこない。それほどまでに機械的に教師という仕事を続けていたということなのかもしれない。

特にこの一年は、ただ惰性で毎日を過ごしてきたただけだ。むしろ生徒たちのことを考えればもっと早く辞めるべきだったのだろう。

—— おまえはどこか普通の人間とは違うな。

浅川が学生の頃、亡き義父が浅川にそう呟いたことがある。義父は浅川が普通の社会生活など送れるはずはないと考えていたらしい。教師になることを告げた時の義父の驚いた顔が今でも忘れられない。だが、結局、その教師という仕事も昨日辞めてしまった。つまりは義父の予想は当たっていたということだろうか。

義父は生前不動産会社を経営し、バブル期の成功からマンションを北仙台に1件、泉中央駅前に1件、そして、泉中央駅から歩いて5分のこのマンションと合わせて3件のマンションを所有していた。3年前に義父が死んだ後、それら全てを浅川が譲り受けている。

浅川はコーヒーをぐつと飲み干した。

その時、玄関のドアがガチャリと開く音が聞こえ、浅川ははっとして立ち上がった。

（美鈴……）

この部屋の鍵を持ち、自由に出入り出来る人間は浅川以外に妹の美鈴しかいない。美鈴は市内にある大学に通っている。普段は泉中央駅前にあるマンションで一人暮らしをしている。両親が連れ子同

士の再婚だったため、浅川と美鈴とは血のつながりは無い。それでも、時々、浅川が仕事で留守の時にやって来ては部屋を掃除してくれたりしてくれている。

浅川の実父は、浅川が幼少の頃に病死しほとんど父のことは記憶していない。浅川にとって義父こそが唯一記憶に残る父親で、美鈴は実の妹のように大切な存在だった。

仕事に出かけているはずのこの時間に、自分が部屋にいるのを見たら美鈴はどう思うだろう。

（どうしようもないか……）

逃げることも出来ず、浅川は再びソファに腰を降ろした。
リビングのドアが開き、浅川美鈴が顔を出す。

「よお……」

浅川は作り笑いを浮かべながら右手をあげた。浅川の姿に美鈴は一瞬驚いたような顔をした。

「あ……お兄ちゃんいたの？ 今日、学校は休み？」

白いブラウスに青いジーンズを履いて、栗色に染めた長い髪を後ろで束ねている。丸顔に大きな瞳が印象的で、そのあどけない顔立ちには高校生と間違えられることもある。駅から歩いてきたせいか、その白い肌がうつすらとピンクに染まって見えた。

「ん？ いや……その……」

浅川は言いにくそうに口を開いた。教師を辞めたことを美鈴に隠しておくわけにはいかないだろう。

「何？ どうしたのよ？」

美鈴はそう聞きながらバッグを向かいのソファの上に置いた。

「実は学校は昨日、辞めたんだ」

途端に美鈴は目を丸くした。大きな瞳がますます大きく見える。

「辞めたあ？ どうして？」

「……なんとなく」

「まったくー」

呆れたように美鈴は声をあげた。「いつかこんなことになるんじ

やないかって思ってたんだあ。これからどうするつもりなの？」

「いや……まだ考えていないんだけど」

子供の頃から美鈴はしっかりした性格で7歳も年が離れているというのに、浅川は美鈴には頭が上がない。初めて美鈴に会ったのは浅川が中学2年の春だ。あの時、父親の陰に隠れておどおどしていた美鈴の姿を今でも思い出す。

「やっぱ父さんが言ってたとおりになったわね」

「父さん？」

「うん、お兄ちゃんが教師になった時からずっと心配してたよ。『あいつに教師なんて勤まるんだろうか』って」

「……そう」

「それじゃマンションの管理人でもする？ 藤岡さんから、そろそろ辞めたいって言われてるんでしょ？」

藤岡夫妻はもう10年も前から北仙台にあるマンションの管理人をしてもらっている。だが、すでに70歳を過ぎ、仕事を辞めて田舎に引越そうと考えているのだと、たびたび相談されている。

父が残したマンションの家賃収入のおかげで生活に困ることもない。浅川自身が管理人をするというのも悪い考えではないかもしれない。

「まあ、ゆつくり考えてみるよ」

「ゆつくりねえ……なんかお兄ちゃんの場合、10年経っても答えなんて出ない気がするわ」

そう言って美鈴は笑った。

その時、部屋のチャイムが鳴った。

「あら、こんな時間に誰だろ？」

美鈴が振り返る。浅川はちらりと壁にかけられた時計に視線を向けた。午前10時55分。

おそらく彼女だろう。

「出てくれないか。鍵は開いてるはずだ」

「私が？」

途惑った表情を見せながら美鈴が玄関に向かう。そして、数分の後、リビングに戻ってきた。

「お兄ちゃん、お客さん」

不思議そうな顔で美鈴は言った。その後ろには一人の女性が顔を覗かせている。ほっそりとした顔つきに、少し青白く感じるほどの肌の色。濃いベージュのワンピースを着たその女性は浅川の姿を見てほっとした表情をした。

「お邪魔します」

その女性はソファに座る浅川に深々と頭を下げた。背中まである長い黒髪がサラリと揺れる。

「いらつしゃい。わざわざすまないね」

浅川は立ち上がると声をかけた。「どうぞ、座ってください」
「——はい」

美鈴が慌ててソファに置かれていたバッグを避けると、女性は素直に頷いて浅川の前に座った。

「お兄ちゃん、この人は？ まさか……カノジョ？」

美鈴は困惑した表情で浅川に訊いた。

「そんなわけないだろ」

「じゃあ誰？」

そのやりとりを見て女性は再び立ち上がった。

「あの……私、徳永香織といいます。浅川さんとは昨日初めてお会いしました」

「昨日？」

美鈴はなおさら驚いた顔をした。「まさかナ・ン・パ？」

「違うよ。彼女には特別な力があるんだ」

浅川は美鈴が誤解しないように慌てて付け足した。「昨日、偶然にもその力を目の当たりにしてね。ちよつと彼女の力について知りたくなって今日、ここに来てもらったんだ」

「特別な力って……」

「彼女には他の人には見ることの出来ないものを見る力があるんだ。」

今日は、それを調べたくて来てもらったんだ」

そう言ってから浅川は香織に顔を向けた。「こいつは僕の妹で美鈴といえます。時々、遊びに来るんですよ。さあ、座ってください」

「……はい」

香織は大人しく腰を降ろした。

「香織さんって何歳です？」

美鈴が興味深そうに訊いた。

「19です」

「え……私の一つ下？」

美鈴は驚いたように手を口に当てた。確かに美鈴よりも香織のほうが大人っぽく見えるかもしれない。

「美鈴、悪いけどお茶いれてくれないかな？」

「え……ええ」

美鈴はまだ納得いかない表情をしながらも素直にキッチンへと向かった。

「あの——」

と、香織が口を開いた。「ご迷惑じゃなかったですか？」

「迷惑？ とんでもない。君を招待したのは僕ですよ。迷惑なわけないでしょう」

「でも——」

と香織はキッチンのほうを心配そうに見つめた。

「美鈴なら大丈夫ですよ。ところで君、今、この部屋に何か見えるものはある？」

そう言われて香織は部屋をぐるりと見回し、首を振った。

「いえ、ここには何も」

「そうか……」

浅川は少し残念そうに右手の人差し指でこめかみのあたりの掻いた。その袖口から包帯が覗いているのを香織はそつと見つめた。

キッチンのドアが開き、美鈴がアップルジュースをグラスにいれて運んできた。

「どうぞ」

ジューズをテーブルに置くと、美鈴もそのまま浅川の隣に座る。

「それじゃいくつか質問させてもらっていいかな？」

「その前に教えていただきたいんですが……」

「何？」

「どうして私の力に興味を？ 何か研究をされているんですか？」

「いや、そうじゃないよ。僕は別にそういうものを専門に研究している研究者ってわけじゃない。だから君の力について何かわかったとしてもどこかに公表するようなことはないから安心してほしい」

「それじゃどうして？」

「うん、言葉は悪いけど『好奇心』かな」

「好奇心……？」

「実はね、君に似たような男を僕は一人知っているんだ」

美鈴が驚いた表情で浅川を見た。

「お兄ちゃん、それって——」

浅川は美鈴を無視して続けた。

「そいつは僕の高校の同級生だったんだけど、そいつにも君に似た力があつた。僕には見えないものがそいつには見えるんだ。よく驚かされたよ。もちろんそいつの持っている力が君とまったく同じものである保証はない。けど、君を昨日見た時、すぐにそいつのことを思い出した。そして、その力について調べてみたいと思ったんだ」

「その人は今何をされてるんですか？」

「さあ、高校を卒業してからほとんど連絡をとっていないからわからないんだ。噂では大学を卒業して刑事になったという話を聞いたことがあるけどね」

「……そうですか。それじゃ会うことは出来ないんですね」

少し残念そうに香織は呟いた。

「ただ、そいつに言わせれば、それは特別な力というわけじゃないらしい」

「え？ どうしてですか？」

「そいつが言うにはね、例えばこうして部屋にいる時に、濡れた傘を持っている人が訪れるとする。そうすると外を見ることがなく、雨が降っていることはわかるだろ？」

「ええ」

「つまり、その人をよく観察することによって、その人の持っている過去やこれからの行動までもある程度は予測できるというんだ。そいつにはずば抜けた観察力があつた。だからこそ、他人にはわからないことまで知りえる力を持っていた」

「私のも同じものだということですか？」

「それはまだわからない。でも、その可能性はあると思ってる」

「でも、私にはそこに存在しない人の姿が見えるんですよ」

香織は少し語調を強めた。

「君に見えるからといって、それが現実とは限らない」

「私が嘘を言っているって言うんですか？」

「いいや、君が言っているのはおそらく真実だろう。ただし、それが必ずしも現実とは限らない」

「どういう意味ですか？」

「たとえば『夢』。眠っている人間にはリアルに見えるものだろう。だが、それは現実のものじゃない。あれは脳が見せているものだ。つまり君が見ているものもそこに本当にあるものではなく、君の脳がそこにイメージを作り出し、君に見せているのかもしれない」

「それじゃ昨日のは？」

「君はあの少年のことを本当に知らなかったと言ったね」

「はい」

「それは本当なのかな？　もしかしたらどこかであの親子に会っていたとは考えられない会？　それにあの父親があトラックの運転手と話をしているところを以前に見ていたのかもしれないね。そして、君はどこかでそれを目撃し、昨日、彼らを見た時、無意識のうちにその記憶のなかから二人が知り合いであることに気づき、その少年の姿をイメージすることでそれを認識したんじゃないかな？」

「……わかりません」

香織は視線を落とし俯いた。

「もちろん僕が言っているのは一つの仮説に過ぎない。実際に君に死者の魂や、現実には存在しない者の姿を見ることの出来る力が備わっていることだって否定は出来ないわけだからね。僕はそれを解き明かしたいんだ」

「お兄ちゃんの好奇心を満たすためにこの人を犠牲にする気なの？」

美鈴が口を挟んだ。

「そう言われると身も蓋も無いなあ。でも、確かに僕の好奇心であることも間違いないし、こんなことに付き合いたくないというのであればそれも仕方ない。そもそも僕はそういうことを専門に研究している人間でもないからね。彼女のことを考えたら、もっと違う人に調べてもらったほうがいいのかも说不定」

「いえ——」

香織は顔をあげた。「そんなことはありません……私自身、なぜ私にこんな力があるかずっと知りたかったことです」

「そう」

浅川は嬉しそうに微笑んだ。

「あの……さつき昨日の事故のことをおっしゃいましたが、やはりあの二人は知り合いだったんですか？」

「ああ、あれは君の言ったように父親とあのトラックの運転手は仲間だったみたいだ」

「仲間？」

「うん、事故にあった被害者の男の子は母親の連れ子らしいんだが父親とは不仲だったみたいだね。そこで父親が子供に高額保険をかけて、事故にみせかけて殺そうとしたらしい」

「……ひどい」

「うん、知り合いの刑事に二人が知り合いなんじゃないかって話をしたら、いろいろ調べてくれてね。おそらく今日には逮捕されるだろう」

「その刑事さんって、さつき話してた人ですか？」

「いや、それはまた別の人だよ」

「それより、どうやって香織さんの力のことを調べるつもりなの？」
また美鈴が口を挟む。

「僕はさつきも言ったようにそういうことに関する専門家じゃないからね。本気で調べるつもりならば、大学に行って専門の教授に調べてもらう必要がある」

「それは嫌です」

香織はきっぱりと言った。「そんなことになるのが嫌だったから、今まで誰にも言わなかったんです」

「うん、僕もそんな形で君を研究の材料に使うつもりはないよ。だから、君が今まで見たり聞いたりしたことを時間のある時にここに來ているいろ話して欲しいんだ。それをもとに僕なりに君の力を分析してみたい。もちろんわずかだけどバイト代は払うよ。どうかかな？」

「わかりました……でも、バイト代は要りません。私は私自身のために浅川さんに話を聞いてもらいたいんです」

「ありがとう」

「いつ来ればいいんです？」

「そうだね、僕は昨日も言ったように今は時間を持て余しているからね。いつでも構わないよ。来る前に携帯に連絡さえいれてくれさえすれば、ここで待ってるよ」

「わかりました、それじゃ明日の夕方にまた來ます」

香織はすっと立ち上がった。

「ねえ」

玄関まで香織を見送り部屋に戻ってくると、ソファに腰掛けたままの美鈴がすぐに声をかけた。「どうして彼女に興味持ったの？」

世の中には死んだ人の姿を見ることの出来る霊能者は他にもいるでしょ？ なぜ彼女なの？ 彼女に何か感じるものでも？」

「さあ……なぜ彼女に興味を持ったのか……それは僕にもよくはわからないんだ。彼女が言うように、本当に彼女が見ているのが『死者の姿』なのかどうかも……」

浅川はそう言ってソファに腰を降ろすと、わずかにコップに残っていたジュースを飲み干した。

「きつと彼女にはそういう力があるのよ」

美鈴は冷静に言った。

「なぜ？」

「言うまでもないわ。でも、なんかさっきのお兄ちゃんの話聞いてると、彼女に見えるものはただの『錯覚』なんて答えを導き出すとしてるように思えるけど？ 何考えてるの？」

「……別に決め付けてるわけじゃない。いろんな可能性を考えてるだけさ」

「ねえ、まさかそれを調べるために教師を辞めたわけじゃ——」

「それは違うよ。彼女と会ったのは教師を辞めたあとだよ。それに彼女と知り合ったのはほんの偶然。ひょっとしたらそういう運命だったのかな」

「さっき話していた高校の時の同級生……あれって真田さんのこと？」

美鈴も真田涼とは何度か会ったことはある。もう十年も前のことではつきりとは憶えていないが、家に遊びに来たのをおぼろげに憶えていた。

「うん」

「懐かしいわね。真田さん、刑事になったの？」

「——らしいよ」

そう言った浅川の表情は浮かなかった。

「どうしたの？」

「うん……この前、ちよつとあいつの噂を聞いたんだ。何でも大きな事件にぶつかって、それが原因で前線から退いたって……それを聞いた時、僕はあいつが言ってた言葉を思い出したんだ」

「何？」

「『幸福を掴むためには平凡であるべきだ』って……あいつはあの頃から自分の力を嫌っていたのかもしれない」

「だから香織さんに声をかけたの？」

「さあ……それは僕自身よくわからない。ただ、彼女を偶然見かけたとき、彼女を放っておいちゃいけない気がしたんだ」

「本当にそれだけの理由？」

美鈴はじつと浅川の顔を見つめた。

「……ああ」

「そう……きつとお兄ちゃんには今の自分の気持ちがわからないのかもしれないわね」

美鈴は意味深に呟いた。

「どういう意味？」

「ううん……なんでもない」

美鈴は視線を落とし小さく首を振った。「それよりマンションのことどうするの？」

「ああ……そのことなんだけど……少し時間をくれないかな」

「仕方ないわね。藤岡さんにはちゃんと連絡しなきゃだめよ。とりあえず、もう1年は管理人を続けてもらわなきゃね」

「明日にでも連絡するよ」

浅川はほつとして言った。

「ま、お父さんのお陰で働かなくても不自由なく生活していけるか

らね。でも、いくら今は大丈夫だからって少しは将来のことも考えなきゃね」

「わかってるよ」

「いいわ。お兄ちゃんも少しは休憩しないとね。一応、今までずっと働いてきたんだし、少しは自分の好きなことしてみたらいいわよ」

「好きなこと？」

「そうよ。お兄ちゃんって昔からどっかお父さんに遠慮してなかった？ お兄ちゃんが教師になるって言った時、私もお父さんも驚いたのよ。お兄ちゃんのことだから周りが驚くような仕事をするのかと思ってたから」

「なんだよ、それ」

「例えば探偵とか……あ、作家っていうのもあったかな。昔からそういう本ばかり読んでたもんね」

まるでからかうように美鈴は言った。

「別に無理して教師になつたわけじゃないよ」

「でも犯罪心理学を専門に研究したかったんじゃないの？」

「昔はそんな気持ちもあったな」

「もうなくなつたの？」

「ちよつと俺が想像してたのとは違つてたのさ」

「どんなふうに？」

「僕が考えていたのは現実的に犯罪者が何をどんなふうにかつていう心の研究だったんだ。けど、大学に入って習つたのはその理屈や理論ばかり」

「あは、そういうのって昔から苦手だったもんね」

美鈴は笑った。

「僕が研究したかったのは、真田がどんなふうにも物を見て、そこからどんなふうにかつて考えるのか……それだったのかもしれないんだ」

「そう……でも、いくら特別な力を持っているからといっても香織さん自身は普通の人間よ。あんまり研究対象として見たらかわいそうだわ」

「うん」

それは浅川にもわかっていた。

交差点の赤く灯る信号を見つめながら、徳永香織はぼんやりと考え込んでいた。

なぜ、今日、あの人のもとへ行つたのだろう。

今までは、自分の力のことを決めて誰にも話すまいと固く決めていた。誰に話しても理解などしてもらえないはずがない。そう思い続けてきた。それが昨日会ったばかりの男に自分の力の全てを見せようとしている。

（浅川圭吾……）

どこか浅川には心を許していいと思える何かがあるように思える。初めて会った時、浅川が自分と同じ種類の人間のように感じたものだ。

『好奇心』

浅川はそう言った。それはこれまで香織にとって何よりも嫌な言葉だったはずだ。それなのに浅川がその言葉を言った時、その正直さにかえって好感を覚えた。

むしろ、子供の頃からずっとこの日が来ることを待っていたような気すらしてくる。自分の力を浅川に解き明かしてもらいたい。その心から願っているのかもしれない。

信号が青に変わり、香織は顔をあげ歩き出そうとした。

その瞬間――

「弱虫ね」

その声に歩き出そうとした足を止め、横断歩道の先を見つめる。そこには小学生くらいの女の子が、うつすらと微笑を浮かべながら香織を眺めている。白いワンピースを着た髪の長い女の子。

それが幼い頃の自分自身の姿であることを香織は知っていた。これまでも何度も香織の目の前に現れている。

途端に香織を息苦しさが襲う。

（何が言いたいの？）

香織はキツと少女の姿を見つめ、心のなかでそう呟く。それで十分に少女には声として聞こえることはわかっている。

「あなたはあの人に助けを求めようとしているのよ」

少女の言葉がダイレクトに頭のなかに響いてくる。「そして、あの人もあなたに助けを求めている」

（あの人が私に？）

「あの人はあなたに自分が失ったものを見つけ出して欲しいのよ」
信号が点滅している。

（それは何？）

「それはあなた自身の目で確かめたら？」

大型トラックが目の前を走り去り、少女はふっと姿を消した。
いつの間にか再び信号が赤に変わり、香織はそっと視線を落とした。

門脇妙子 1 - 1

1・門脇妙子

いつものようにコンビニでお弁当を買ってからアパートに戻る。すでに午後11時を過ぎていて、アパートに向かう道には人影が見えない。門脇妙子はわずかに周囲に注意を払いながら、ほんの少し足を早めた。

カツカツとアスファルトを叩く自らの靴の音がやけに高く響く気がする。

一人暮らしを始めた当初はマメに料理もしたものだが、今では仕事に時間を取られ滅多にキッチンに立つこともなくなっている。疲れて帰ってから自分ひとりのためにわずかな食事を作るくらいなら、コンビニで買った弁当を温めて食べたほうがよほど良い。

市内にある情報処理の専門学校を卒業してすでに2年。帰宅するのはいつも午後10時を過ぎている。それでも最近はまだ早く帰宅出来ているほうで、忙しい時期になれば一ヶ月間、休みなしで毎日深夜のタクシーで帰ることもある。

だが、そんな生活ももうすぐ終わる。

一カ月後には高校の頃から付き合ってきた丸山修との結婚が待っている。両親との同居ということが心配の種ではあるけれど、義母とは今のところうまくやっていけるような気がしている。

——結婚して幸せになるうなんて思っちゃだめよ。結婚は忍耐なんだから。

結婚すると両親に報告した時、母が心配そうに話してくれた。確かに母が言う通りかもしれない。もともと結婚に甘い願望など持っていない。幸せな結婚生活への憧れはもうとうの昔に捨て去っている。

(きつとうまくいくわ)

修ならきつと自分を大切にしてくれるだろう。

少し軽い性格ではあるけれど、修はいつでも自分のことを一番大切に考えてくれる。この2年間、いろんな物も買ってくれた。今、着ている濃紺のスーツも修が買ってくれたものだ。

付き合って6年。全てが順調だったわけではない。修は何度も浮気をすることもあったし、自分にも密かに思いつづけていた人もいた。別れようと思い悩んだ時期もある。それでも最後には修との未来を選んだのだ。

まだ修を選んだことが正しかったのだと言い切ることは出来ない。それでも幸せな家庭を築きたい、と妙子は心から思っていた。

そのためにも今の仕事を綺麗に終わらせておかなければいけない。すでにシャッターの閉まったクリーニング屋の横の路地に入ると白い2階建てのアパートがすぐそこに見える。

妙子はほっと一息ついた。

コンビニからアパートまでの道は街灯も少なく、いつも夜道を歩くのは緊張する。

最近、どうも誰かに見られているように感じる人が多い。妙子はもう一度後ろを振り返り、誰も尾けてこないことを確認した。

階段をあがり、一番手前の部屋の鍵を開けて中に入る。部屋のなかがほんの少しいつもよりも涼しい気がした。

妙子は部屋の電気をつけると疲れた身体を癒すように、クッションの上に座り込んだ。いつそのまま身体を横にして眠りたくなるほど疲れている。

それでも――

（電話しなきゃ）

部屋に戻ってきて最初にやるのが修への電話だった。どんなに遅くなったときでも電話するよう修から言われている。付き合い始めた頃はそれが愛情なのだと嬉しい気もしたが、最近では義務化していて鬱陶しいと感じるときもある。

修はまだ大学生で、卒業したらすぐに実家の不動産屋を継ぐこと

になっている。それでもまだ幼い感じのする修との結婚を考えると、これでよかったのだろうかとわずかに迷いが生じる。

きつと結婚したら今以上に束縛されるのだろうか。

友達との旅行もこれまでのように簡単には行けなくなるのかと思うと、今から少し憂鬱になる。マリッジブルーというほどのことでもないのだが、もう少し遊んでから結婚するほうが良かったのかもしれないと時々思うことがあった。

それでも、自分が選んだ人を信じたかった。

（そう、きつと大丈夫）

部屋に電話がないため、バッグから携帯電話を取り出して修へ電話をかけた。

——はい。

待ち構えていたかのように、すぐに修の野太い声が聞こえてきた。

「ただいま。今帰ったよ」

——相変わらず遅いな。

ほんの少し非難するような口ぶりも今ではすっかり慣れてしまった。

「しょうがないのよ。今は引継ぎとかいろいろあるんだから」

これまでも何度か説明している。

——日曜日に式の打ち合わせあるの憶えてるよな。大丈夫か？

「うん、大丈夫。日曜はちゃんと休めるから」

——土曜日は休めないのか？

「うん……ちよつと都合悪いんだ。ごめんね」

本当は土曜日も休みを取れることになっているが、すでに会社の友達と遊びに行く約束をしている。だが、そのことを正直に言えば修はきつと怒るだろう。とにかく自分を一番に立ててもらわなければ、すぐ不機嫌になる性格なのだ。亭主関白といえいいのか、自己中心的といえいいのか、いずれにしてもこれからの生活が思いやられる。

——まったく。もうすぐ辞めるんだからそんなに仕事に時間取らな

くてもいいんじゃないか？ 有休だつて全然使つてないんだろ？

「そりゃそうだけど、人手だつて少ないし、結婚して退職したからつていつてまったく縁がなくなるわけじゃないんだから」

——まさか、結婚してから働くつもりじゃないだろうな。

「違うわよ」

そうしたいのは山々だ。だが、修がそれを許してくれるはずはない。女は家を守るのが一番の幸せ、というのが修の考え方なのだ。

妙子は修に聞こえないように小さくため息をついた。ふわりと冷たい風が頬を撫でる。

（あら？）

妙子はふと振り返った。まるで窓から風が吹き込んでいるようにカーテンがゆっくりと揺れている。

（昨夜、窓はちゃんと閉めたはずだし……今朝は開けてないわよね）
妙子はじつとカーテンを見つめた。今はもうカーテンは揺れを止めている。

——本当にあと一ヶ月で辞められるんだろうな。

「うん、大丈夫よ」

妙子はぼんやりとしたまま答えた。「私、帰ってきたばかりで今からご飯食べるの。寝る前にまた電話するから——」

そう言つと妙子は電話を切った。

ふわりと再びカーテンが大きく膨れ、冷たい風が吹き込んでくる。

「やっぱり……」

妙子がカーテンを開けると窓がわずかに空いている。

「変ね……」

ぱちりと閉めた後、鍵をかけようとしてはつとした。鍵の部分を中心に大きくガラスにヒビが入り、鍵のところのガラスには小さく穴が空いている。

「やだ……」

背筋に冷たいものが走った。

つい先日、テレビで窓ガラスをこじ開けて侵入する泥棒の番組を

見たばかりだった。慌てて部屋を見回す。右手はすでに警察に電話出来るように携帯電話を準備している。だが、部屋のなかは今朝、妙子が出て行ったままで荒らされたような形跡は見えない。わずかながらカーペットが汚れているような気がするが、最近は忙しさのため掃除もあまりやっていなかったたので、誰かが侵入したという確信も持てない。

念のために妙子はベッド下の引出しを開け、そこから小さな小箱を取り出した。印鑑や通帳はこの中に入っている。開けてみると通帳も印鑑も手付かずのまま残されている。

ほっと安堵のため息をつくと同時に侵入者の目的がわからなくなる。

（どうしたんだろ……）

確かに通帳を盗んでいっても銀行に行った時点で足がつく可能性がある。現金狙いの泥棒だったのだろうか。だが、このベッド脇の引き出しはおろかタンスにしても開けられた形跡はない。一瞬、『ストーカー』という言葉が脳裏をよぎるが、自分に限ってそんなことがあるわけがないと妙子はすぐにその考えを打ち消した。

ほんのわずかに押し入れの扉が空いているのが見えた。

押し入れのなかには客用の布団と、衣装ケース、普段は使わないようなファンヒーターなどが押し込められている。

妙子はそつと手を伸ばした。

警察を呼ぶにしても、何を盗まれたのかをはっきりさせておいたほうがいい。

ごくりと唾を飲み込んでから妙子は一気に扉を開けた。

だが、そこもまたいつもとまったく同じように物が並んでいるだけだった。布団も衣装ケースもいつものように押し込まれている。

ほっと大きく息をつく。

（なんなの？）

妙子は押し入れを背にして部屋を見回した。

おそらく鍵をこじ開けられたのは昼間のうちだろう。いつも朝、

部屋を出る前には窓の戸締りを確認するのが日課になっていて、今朝も怠りなくやったはずだ。だが、部屋の中は荒らされた形跡がまったく見えない。

（鍵を開けただけでいなくなった？）

そんなことがあるのだろうか。それともあれは泥棒の仕業ではないのだろうか。どこかの子供がボールをぶつけ、ただ割れただけのものなのかもしれない。もし、そうなら警察を呼んでも恥をかくだけだ。

だが、もし本当に泥棒だったら？ やはり警察に連絡したほうがいいのだろうか。

そんなことを考えながらそつと携帯電話を持った右腕を上げた。

その瞬間――

その右腕を背後からぐつと何者かが掴んだ。

次の瞬間、目の前に大きな黒い手袋が現れ、それは叫ぶ間を与えずに妙子の口を塞いだ。

（押入れた！ 押入れの奥に隠れていたんだ！）

そのことが理解出来たときにはすでに遅かった。叫び声を上げることも出来ず、その腕のなかから逃れることも出来ない。

「うううう！」

恐怖心で頭のなかが一杯になる。黒い革の手袋に口を押さえられながら、妙子は必死にもがいた。だが、その腕の力は強くそこから逃げることもどまつたく出来ない。

掴まれた右腕が捻り上げられ、その痛みから携帯電話が手からぽろりと落ちた。

「ムダだよ」

その低く微かな声と共にそつと首筋に息が吹きかかる。その声に全身に鳥肌が立つ。

「ううう！」

捻り上げられた右腕の痛みから涙が溢れてくる。

「痛いかい？ ふふふ……」

妙子が苦しむのを楽しむように小さな笑い声が聞こえてくる。

(……助けて)

だが、しっかりと背後から口を押さえつけられ、それは声に出すことは出来なかった。

突然、その捻り上げられていた右腕が自由になった。妙子は最後のチャンスとばかりに全身に力を込めてその腕のなかから逃げ出そうとした。しかし、どれほどの力を込めてもまったくその腕から逃れることは出来ない。

やがて、背後からもう一本の腕が妙子の顔に覆い被さってきた。その大きな手のなかに真っ白なハンカチが見えた。ずっと今まで口を覆っていた左手と右手が入れ替わる。

ブンと微かに薬品の匂いがした。

(だめだ……吸っちゃいけない)

本能的に妙子はそれが何であるかを悟っていた。

「あなたのこと傷つけたくないんだ」
また小さくささやき声が聞こえた。

午後2時。

「それでは――」

と、浅川はソファの正面に座る濃紺のワンピース姿の徳永香織に声をかけた。「まずは君が最初に自分の力に気づいた時のことを教えてもらえるかな？ 憶えてる？」

「はい。小学校2年の時です」

香織はその質問が来ることを予想していたように間をおかずに答えた。

「その時の状況を教えてくれる？」

「朝、隣に住んでるおばあちゃんが透明な階段をゆっくり昇っていくのを見ました。それが最初です」

香織の答えに浅川は表情を変えなかった。

「透明な階段？ それって天国への階段？」

「――だと思えます。その日の午後には学校から帰ってきておばあちゃんが死んだことを聞かされました」

「そう……その時、おばあちゃんは君に何か言った？」

「いいえ、ただ静かに笑っていただけです」

「君はそのおばあちゃんのことを良く知っていたの？」

「ええ、家が隣だったこともあって家にも遊びにきてたし、私もよく遊んでもらいました」

懐かしそうに香織は言った。

「好きだった？」

「そうですね、今じゃあんまり憶えてないけど」

「おいくつだったの？」

「確か96歳だったと思います」

「へえ、ずいぶん長生きだったんだね」

浅川は驚いたように言った。

「そうですね。本当に元気なおばあちゃんです。私が学校に行く時間にはいつも庭で水を撒いていたんですよ」

「君がおばあちゃんと現実最後に会ったのはいつかな？」

その浅川の質問に香織は少し考え込んだ。

「さあ……あんまり憶えていません。ただ、体調を崩して一週間くらい寝こんでいるという話を聞いて、亡くなる二日くらい前にお見舞いに行ったように記憶してます」

「それじゃ君はおばあちゃんが体調を悪いことを知っていたんだね」

「ええ、そうですね。……あんまり憶えてはいないけど……」

「ふうん」

浅川は小さく頷いて手帳に何かを書き込んだ。その動作を見ながら香織はおずおずと口を開いた。

「あの――」

「何？」

浅川は手を止めて顔をあげた。

「先生はやはり私が見えているものが幻覚だと思っているんでしょうか？」

「いいや。僕は肯定も否定もするつもりはないよ。まだそんなことを判断するほどの材料はないからね。それに君にそのおばあちゃんの姿が見えたこと、それは紛れもない事実だと思っているよ。ただ、それが本当の『死者の姿』なのかどうか……それはまだわからないけどね」

「『死者の姿』……まるで『伊吹の民』ですね」

「……え……」

浅川は顔を強張らせた。「なぜそんな話を？」

「私……隣のおばあちゃんに子供の頃聞いたことがあるんです。このあたりに昔、『伊吹の民』と呼ばれる人たちが住んでいたってこと……その人たちは『生』と『死』を操り、なかには死者の姿を見ることが出来る人もいたって……先生は知ってますか？」

「……聞いたことはあるよ」

その話は浅川も知っている。死んだ母が子供の頃に何度も繰り返し話して聞かせてくれた話だ。どの文献にも載っていないただの昔話。世間でもそんな話を知っている者などほとんどいないことだろう。だが、その一族の存在を浅川は誰よりも信じている。

「私も『伊吹の民』なんでしょうか。先生はどう思います？」

「さあ……どうかな。それと僕はすでに教師を辞めた人間だから『先生』なんて呼ぶ必要はないよ」

浅川は笑顔を作ってみせた。

その時、リビングのドアが開いてベージュのスカートに黄色いトレーナー姿美鈴が走り込んできた。駅から走ってきたらしくわずかに息を切らせている。

「あーん、やつぱりもう来てたんですね」

美鈴は香織の姿を見て言った。

「お邪魔してます」香織は軽く頭を下げた。

「もう始めてたの？ 私が来るまで待っていてくれればいいのに」

そう言いながら美鈴は浅川の隣に座った。

「なぜ？」

「私だって興味あるもの」

「だからっておまえを待つてるわけにはいかないだろ。おまえがいつ来るかなんてわからないからな」

「今日はちよつと変なことがあつて遅くなったのよ」

美鈴は顔をしかめた。

「変なことって？」

「うん、ネットの掲示板に変な書き込みがあつたの」

「掲示板？」

「そう、『出会いの掲示板』」

「おまえ、そんなことやってるの？」

浅川はほんの少し心配そうな顔で美鈴を見た。

「別にそんな心配するようなことはないわよ。結構おもしろいわよ。普通なら会うことのないような人たちが集まって、いろんな話が聞

けるわ。暇つぶしにはもってこいだわ」

「まさか会ったりはしないんだろうな」

「オフ会？ 私はまだ行った事ないけど、そんな珍しいことでもないわよ」

美鈴は平然と言った。

「あのなあ——」

「お兄ちゃんの言いたいことはわかってるわよ。でも、私のことでそんな心配したって意味ないでしょ」

美鈴は浅川を制して続けた。「それでね、帰りに図書館にあるパソコンからネットに繋いだんだけど、そこになんか変な書き込みがあつたの」

「どんな？」

「『私の標本をおわけします』って」

「そのどこが変わってるんだよ？ 別に変つてとは思えないけど……」

「そうじゃないのよ。ちょっと一度、見てくれればわかるわよ。お兄ちゃんパソコン貸してね」

美鈴は立ち上がると奥の部屋に飛び込んでいくと、すぐに浅川のVAIOノートを持って戻ってきた。

「おい、そんなあとでいいだろ」

浅川は香織を気遣うように言った。だが、美鈴はそんなこと気にする様子もなくテーブルの上にVAIOノートを置くと電源を入れた。

「ごめん、ちょっと待ってね」

美鈴は顔を上げて香織に言った。

「私なら構いません。私もちょっと興味あるし」

「君もネットとか使うの？」

「たまにメールくらいなら」

「ほら、見てみて」

美鈴はOSが立ち上がるとすぐにブラウザを立ち上げ、そこにア

ドレスを打ち込んだ。すぐに掲示板が表示される。

「どれ？」

浅川はディスプレイを覗き込んだ。

いくつものスレッドが並んでいて、どれがその書き込みされたものかはすぐには判断できない。

「えっと……これよ」

美鈴はスライドパッド上で器用に指を動かして、マウスを一つのスレッドに持っていた。

『標本おわけします』

さらに美鈴がそのスレッドをクリックすると、そこに書き込まれた一覧が表示される。その先頭にそのスレッドを立ち上げた人間のメッセージが書かれていた。

『私の持つ標本をおわけします。ただし、一体そのままというわけにはいきません。配達を考え、体の一部一部をそれぞれ切断した形でおわけします。希望される方は体のどの部分が欲しいかをちゃんと書いたうえで、申し込んでください。』

ちなみに標本は22歳の女性です。身長157センチ。体重41キログラム。血液型は不明です』

「ね——」

と美鈴は険しい目でそれを読む浅川に声をかけた。「これってまるで人間の身体をバラバラにして、欲しい人にはあげますよ……ってそんなふうに読めるでしょ？」

「ああ」

「このHNってなんですか？」

香織が訊いた。掲示板の書き込みの最初に『HN：ウイング』と表示されている。

「ハンドルネームの略称よ。ネットのなかでは本名を使わずにハンドルネームで呼び合うの」

「それじゃこれを誰が書き込んだかはわからないってことですね」

「そう。ネットのなかはみんな匿名なの。誰が書きこんだかわからない世界なのよ。だから人によつては他人の悪口とかを平気で書く人がいっぱいいるの」

「いや——」

浅川が顔をあげた。「その気になれば調べことは出来るよ」

「え？ どうやって？」

「ネットに入るとき、そのパソコンにはＩＰアドレスといつてユニークな番号が振られることになってるんだ。それは自分が契約しているプロバイダによつて決まる。そして、こういう掲示板には必ずログと言われる記録が残ってる。どのＩＰアドレスでどんなことが書き込まれたか、という情報だ。つまり、そのログとプロバイダのＩＰアドレスを割り振った記録を付き合わせれば、誰が書き込んだものかはわかるようになってるんだ」

「へえー。お兄ちゃん、詳しいのね」

感心したように美鈴は浅川を見た。

「学校の授業に情報処理の科目があるんだ。それで生徒たちに教えるなきゃいけないで、前にちよつと勉強したことがある」

「それじゃもしこれが本当の殺人事件だったりしたら、それはすぐにそのログから犯人を割り当てることが出来るってことなのね？」

美鈴は再びパソコンの画面に視線を戻した。

「うん。一般の人がそれを見ることは出来ないけれど、警察ならプロバイダにログを提出させることは出来るだろうからね」

「あ——」

突然、美鈴が驚いたように声をあげた。

「どうしたんだ？」

「レスがついてる」

美鈴はさきほどの書き込みの次に書かれたものを指差した。

『HN：FKAZU

何がもらえるの？

なんだかわからないけど、もらってみようかなあ。メールくださいね』

「レス？」

「うん、書き込みに対する返信よ。こんなものにレスつけるなんてバカだなあ。気持ち悪いとは思わないのかしら」

美鈴は呆れたように言った。

「本当に死体の一部送られてきたらどうするつもりなのでしょう」と香織が呟く。

「まさか。一般の利用者はこれだけの書き込みを見たからって相手を特定出来ないよ」

浅川が香織に説明した。それから美鈴に

「おまえも変な書き込みにレスなんてするなよ」と言った。

「わかってるわよ……まあ、こんな書き込み、ただの悪戯だとは思うけど……ちよつと気味悪いけどね」

「こういう書き込みは多いのか？」

美鈴はちよつと考えてから首を振った。

「たまに変な書き込みする人はいるけど……大抵はみんなに無視されて、時間が経って消えていくだけよ」

「そうか」

浅川は考え込むように額に右手を当てた。

「どうしたの？ まさかお兄ちゃん、これが本当の殺人事件だなんて思ってるの？」

「それじゃどうしておまえはこれを僕に見せようと思ったんだ？」

「え……それは……」

美鈴は口籠もった。

「何か嫌な予感がしたからだろ？」

「……それは確かにそうだけど……」

美鈴には特別な力が備わっているわけではない。それでも子供の頃から妙に勘が働くことがある。

「あとで倉田さんに電話してみるよ」

「え？ 倉田さんに？ でも、ただのいたずらだったらどうするの？」

「いたずらならそれに越したことはないだろ」

「あの……失礼ですけど……倉田さんって？」

香織が口を挟んだ。

「僕の知り合いの刑事さんですよ」

浅川は再び、その書き込みを眺めながら答えた。「何かこれを見て感じるものはありますか？」

ちらりと香織を見て浅川は訊いた。

「いえ……べつに……ただ、もしいたずらだとしてこんなふうに女性の特徴を書くものでしょうか？」

「どついう意味？」

美鈴が香織の顔を見た。

「やけにリアルな気がしませんか？」

「リアル……？ ただ年齢と身長、体重が書かれているだけよ。血液型は不明になってるし……」

「そこがリアルなんだよ」

浅川が代弁するように言った。「ただのいたずらでどうでもいい書き込みながら血液型や生年月日まで適当に書けばいいだろ。ところがここでは身長や体重などの身体的な特徴は書いているくせに血液型だけはわざと不明と書いている」

「やだ……嫌なこと言わないでよ」

美鈴は眉をひそめた。

「ま……いたずらであって欲しいもんだな」
浅川はじつとディスプレイを見つめた。

学校を辞めてすでに一週間が過ぎようとしている。

これまで仕事に追われていた毎日とは違い、時間を持て余すことも多くなっていた。徳永香織はこれまで大学からの帰宅途中に2度、浅川のもとを訪れている。それは浅川にとって何よりも楽しみな時間の一つになっていた。

美鈴が心配していた掲示板の件もあれ以来何も起こっていない。あれはただの悪戯に過ぎなかったのかもしれない。

浅川はいつものようにコーヒーを飲みながら、ぼんやりと新聞を広げていた。仕事を辞めて曜日感覚が失われるのを予防するかのように、浅川は毎日新聞記事の隅々まで目を通す事になっている。

その時、チャイムが部屋に鳴り響いた。

浅川は顔をあげると思わず壁に掛けられた時計に視線を移した。5年前、浅川が教師になった初めての年に、美鈴が就職祝いにと少ない小遣いのなかから買ってくれたものだ。午前11時。おそらく香織ではないだろう。香織が来るときはいつも事前に電話をよこすことになっている。

（誰だ？）

再びせわしなくチャイムが響く。その気短なチャイムの鳴らし方に、浅川は一人の男の顔を思い出した。

結局、浅川が玄関のドアを開けるまで、ほんの1、2分の間に5回以上もチャイムが鳴り響いた。

ドアを開けると予想した通りの男が立っていた。

「よお、やっぱりいたな」

倉田俊彦は宮城県警捜査1課の刑事で、浅川にとっては大学時代の2年先輩にあたる。その大柄な体格やいかつい顔つきは生まれつき刑事になることが定められていたかのように感じる。

あまりセンスがいいとは言えない黒いスーツを着た倉田は浅川に

断ることもなく、靴を脱ぐと上がりこみリビングのドアを開けた。

「ええ、そんなに何度も鳴らさなくてもちゃんと聞こえてますよ。

あれ？ 一人ですか？ 今日は休みですか？」

刑事がいつも二人以上でチームを組んで行動するルールになっていることは浅川も聞いて知っている。

「休みたい？ おまえじゃあるまいし、そんな優雅な生活してねえよ。相棒なら車のなかで待たせてる。今年の春に入ったばかりの新人でな。パチンコでもしてろって言うのに生真面目に車で待つほうを選びやがった」

そう言つて倉田はどつかとソファに腰を降ろした。

「何か飲みますか？」

「いや、いらん」

手を振る倉田を見て浅川もソファに座る。

「今日はどうしたんですか？」

「おまえ教師辞めたんだってな」

倉田は唐突に切り出した。

「ええ——どうしてそれを？」

浅川は倉田がそのことを知っていることに驚いた。だが、考えてみればそれを知っているからこそ、こんな平日の昼間にやってきたのだろう。

「服部教授が教えてくれたんだ」

「服部教授？」

服部教授は大学時代の恩師で心理学部の教授をしている。先日辞めた白新学園も服部に紹介してもらって就職したところだった。浅川は最近会っていないが、倉田は今でも時々大学に訪れているらしい。

「教授、おまえが辞めたって聞いてがっかりしていたぞ。まあ、いずれ辞めるだろうとは思っていたみたいだな」

浅川は肩をすくめて苦笑いした。服部教授からの紹介で就職したのだから、辞めればその連絡が教授の元に届いていてもおかしくは

ない。近いうちに一度挨拶にいかねばいけないだろう。

「俺も同じように思ったけどな」

倉田はニヤリと笑って付け加えた。

「ひどいですね」

「もともとおまえにや教師なんて仕事は向いてないんだよ」

「そうですか？」

「教師なんてお山の大将を気取りたい奴がやるもんだ。大人の社会で通用せず、せめて子供たちの中だけでも『先生』と呼ばれたい奴らの集まりなんだからな」

倉田の教師に対する評価はあまり高くは無い。

「そんなことはありませんよ。中にはマジメに生徒のことを考えてる教育熱心な教師だっていますよ」

「甘いな。今の世の中、警官と教師ほど信用出来ない人種はいないぞ」

倉田はマジメな顔をして言った。

「倉田さんも刑事じゃないですか」

「今話してるのはあくまでも一般論だ。俺は一般論には含まれん。おまえみたいな奴が本気で教師なんてやったらすぐにノイローゼになっちまうよ」

「それでも5年やってたんですよ。別にノイローゼにはならなかったですけどね」

「ギリギリだったんだよ。それで？　これからどうするつもりなんだ？」

「さあ……」

「何も考えてないのか？」

「今のところは」

「ま、おまえ一人くらいならマンションの家賃収入で食っていけるか」

倉田はあっさりと言った。だが、それも決して嫌味には聞こえない。もともと遠まわしに嫌味や皮肉など言わないタイプの男だ。

「美鈴にはマンションの管理人をやれって言われてますよ」

倉田も美鈴のことはよく知っている。

「美鈴ちゃん？……ふうん……そうか、それもいいかもしれんな。少しのんびりして休んだほうがいい」

一瞬、なぜか倉田は言葉を濁した。

「少し考えてみるつもりです」

「そっぴや、柳田が訪ねてくるように言っただぞ」

倉田は思い出したように言った。

「え？ 柳田さん？ まさか柳田さんにも僕が教師を辞めたこと話したんですか？」

柳田秀三は倉田の幼馴染で今は長町にあるカウンセリングセンターの所長をしている。柳田とは倉田を通じて知り合ったのだが、その理屈っぽい偏屈な性格が正直言って浅川は苦手だった。だが、柳田は意外にも浅川を気に入っているらしく、以前から会ったたびに教師など辞めてうちで働けと誘われつつづけている。

「なんだ、まずかったのか？」

倉田はまるでおもしろがっているように笑った。

「いや……まずいってことはないですが……」

「一度、会って来い。あいつはあいつでおまえのことを心配してくれてるんだ」

「ええ、それはわかってますよ。でも少しの間、のんびりとこれからのことを考えてみたいんです」

浅川も柳田のことが嫌いというわけではない。ただ、あまりに癖のある男のため、ある程度の心構えがないと会う気にはなれない。

「それじゃしばらくは何もやることなしか」

「そうですね……」

一瞬、考えてから浅川は答えた。徳永香織のことまで倉田に話す必要もないだろう。話したところで倉田が香織の力を理解出来るとも思えない。「でも、そんな話でわざわざ来たんですか？」

「バカ、そんなわけないだろ」

倉田は履き捨てるように言った。

「それじゃどうしたんです？」

「この前の一件のことを、一応、おまえに話しておこうと思ってな」
そう言っただけで倉田は座りなおした。その表情が真剣なものに変わっている。それはまさしく刑事の顔だ。

「この前の一件って……まさか掲示板の件ですか？」

「そうだ——今日の午前中、あの掲示板の書き込みにレスをつけた藤代光男という専門学校生から連絡があった。今朝、宅配便で荷物が送られてきたそうだ」

「荷物？ 中身は？」

嫌な予感がする。

「指だ」

「指？」

浅川はその荷物を想像して眉間に皺を寄せた。「本物ですか？」

「ああ。指が5本、小さな箱に詰められて送られてきた。おそらく親指から小指までのものだろうな」

「誰のものはわかったんですか？」

「いや、ただ先週から行方不明の届の出ている女性が一人いる。ひよつとしたらその女性かもしれん」

「そうですね……本当の事件になってしまったんですね」

事態の重さを考え、浅川はため息とともに言った。「そういえばログは調べましたか？ ログから追いかければあれを誰が書いたかは調べられるでしょ」

「調べたさ。そいつの書き込まれたのは一番町にあるネットカフェに置かれたパソコンからだったよ」

「ネットカフェ？」

「そう。『リラックスカフェM』って店だ」

「そこ会員制ですか？」

「いや。そこは入場料500円、一時間延長で100円ってシステムの店で客の管理まではやってなかった」

「防犯カメラは？」

「一日単位で入れ替えてるんで、昨日のものは残っていてもそれ以上前のものは上書きしちまって無くなってた」

「そうですか……」

「なぜそんなに気にするんだ？」

「え？」

倉田の言葉に浅川は顔をあげた。「嫌だな。倉田さんが事件のことを教えてくれるから、僕はちょっと聞いてみただけですよ」

「そうか？ 妙に気にしているように見えるんだが……」

倉田にじつと顔を見つめられ、浅川は思わず視線を逸らした。確かに気になっていないといえば、それは嘘になる。

「そりゃ——この事件は普通の事件とは違ってますから」

「異常犯罪か……」

倉田は小さく舌打するとソファに凭れかかり宙を見つめた。それからすぐに何かを思いついたように再び浅川のほうへ顔を向けた。

「どうだ？ そんなに気になるならおまえ、俺の手伝いをしないか？」

「え？ ということですか？」

その倉田の言葉に浅川は驚いて聞き返した。「冗談のつもりなのだろうか、と倉田の表情を伺う。だが、その表情から心のなかを読むことは出来ない。

「そんな難しいことじゃない。今度の事件についておまえの意見を聞かせてくれるだけでいいんだ。俺はこういう犯罪は苦手なんでな。情報は俺が持つてきてやる」

「そんな……ダメですよ。僕は警察の人間じゃありませんよ」

「そんなことはおまえに言われなくてもわかってるさ。おまえは警察とはまったくの無関係で現在失業中の男だ」

「だったら——」

「おまえ、そういうのは好きだったじゃないか？ 学生の頃から新聞で事件の記事を読んで自分なりの推理を披露してたろ？」

倉田はまるでからかうように言った。

「そんな……だからって現実に捜査をしたいなんて思っていたわけじゃありませんよ」

「ふうん。俺はてつきりおまえは刑事か探偵にでもなるつもりかと思っていた」

「違いますよ」

浅川は慌てた。興味本位から大学時代に犯罪心理学の勉強をしたことはあったが、警察官はもちろん探偵になることなど考えたこともなかった。

「いずれにしても、どうせ暇なんだろう？ 人間、暇だとなんかことはない。ちよつとした推理ゲームだと思えばいいじゃないか」

「暇ってわけじゃありませんよ」

「何かあるのか？」

「いや……それは……」思わず口籠もる。

「ないんだろ？」

「倉田さん——」

「事件に興味あるみたいじゃないか」

「そりゃ興味はありますが……いや、だからって素人の僕が実際に事件に手を出せるはずないじゃないですか。倉田さんだって守秘義務ってものがあるでしょ」

刑事になって以来、倉田が事件のことを浅川に話すことなどほとんどなかった。話しても新聞やニュースで報道された内容ばかりで、極秘情報に当たるようなことは喋らないように注意していたはずだ。

「そんなものはおまえと俺が黙ってれば誰にもバレるものか」

これまでとは違い、倉田は平然と答えた。

「そんな無茶な……それに僕なんて何の力にもなれませんよ」

「そうかな？ この前のこともあるじゃないか」

「この前？」

「まさか忘れたわけじゃないだろ。父親が子供を保険金狙いで事故に見せかけて殺そうとした事件。あれだっておまえが運転手と父親

が知り合いじゃないかって連絡をくれたのがきっかけで解決したんじゃないか」

「あ……あれは……」

浅川は口籠もった。まさか徳永香織のことを倉田に話すわけにはいかない。

「いいから手伝え」

倉田はなおも粘った。おそらく自分がその申し出を了承しない限り決して引こうとはしないだろう。

浅川は小さくため息をついた。こうなってしまったからは成り行きに任せるしかないだろう。それに確かにこの事件について興味があることは事実だ。

「……わかりました」

「それじゃ女の身元を言うぞ」

倉田は満足そうににやりと口をゆがめるとジャケットのポケットから手帳を取り出した。

「ちょ、ちよつと待ってください」

浅川は慌てて立ち上がると部屋の隅に置かれた棚のなかからメモ用紙とボールペンを持って戻ってきた。

その姿を確認してから倉田は口を開いた。

「名前は門脇妙子。22歳の女性だ」

倉田は手帳に挟んであった一枚の写真を浅川に向けてテーブルに置いた。そこにはピンクのブラウスを着た若い女性と茶髪の男性が並んで写っていた。

「こっちの男性は？」

「それは婚約者の丸山修。東栄大学の4年生だ」

「へえ、学生で婚約ですか」

「しかも一カ月後には結婚式を控えていたらしい。なんでそんなに急いで結婚したいものかね」

倉田は独り言のように言うつとさらに続けた。

「身長158センチ、体重は39キロ。血液型はAB型。こいつは

一ヶ月前に会社で行った健康診断の結果だ。住所は太白区富沢南3丁目―6―22 コーポラス山崎の201号室。その婚約者の丸山修から行方不明の届が出されている。派出所の警官が行ってみたところ鍵はかかっておらず、室内は荒らされた形跡はなかった。ただ、窓ガラスがドライバーかなにかでこじ開けられたような小さな穴があいてた」

「穴？」

「こそ泥のよくやる手だ」

「そこから侵入を？」

「ああ。最近流行の焼き破りって方法だろう。バーナーやライターで鍵部分のガラスを暖めて、割れやすくなったところをこじ開けるんだ」

「現場に指紋は残ってたんですか？」

「ああ、いくつが残っていた。だが、女のもの、その恋人のものはucciで他のものは見当たらない」

「女の指紋がわかってるなら、送られてきた指が本人かどうかはわかりますね」

「いや」

倉田は首を振った。「あいにくとそれは不可能だ」

「どうしてですか？ 腐っていたとか？」

「いや、保存状態はすこぶる良かった。送ってきたときも箱のなかにはドライアイスが敷き詰められてた。それこそ犯人はコレクションのように大事に扱ってる」

「それじゃどうして？」

「送られてきた指には指紋がなかったんだ」

「え？」

「犯人は一本一本指の指紋を削ぎ落としたらしい」

あまり想像したくはないが、どうにもその指のイメージが頭のなかに広がっていく。

「何のために？」

「知らんよ」

そう言つと倉田は急にそわそわと手を動かし、ポケットのなかからタバコを取り出した。「最近、女房が本数を減らせてうるさいんだ。吸つていいか？」

そう言いながら倉田は浅川の答えを待つことなくライターでタバコに火を点けた。倉田は3年前に結婚し、今では2歳になる女の子の父親になっている。

「それじゃ指紋からはその指が行方不明になっている門脇妙子のもとは言えないわけですね」

「そういうことだ。門脇妙子が最後に目撃されたのは10月1日の夜だ。仕事帰りに近所のコンビニで買い物をしたのをその店員が記憶していた。毎日のようにやってくる常連だったそうで店員もよく憶えていたんだ。実際に店の防犯カメラにも残っていた」

「それが最後ですか？」

「その後、恋人である丸山修と電話で話をしている。この時もいつもと変った様子はなかったそうだ。だが、翌朝、丸山がメールを送ったところ返事もなく、会社にも出社もしていない。その一晚の間に門脇妙子は姿を消した。部屋にはコンビニで買った弁当が手付かずのまま残されていた。誘拐されたとなると丸山修と電話で話をした直後だろう。指の写真、見るか？」

倉田は味わうようにゆっくりと紫煙を吐きながらポケットを探った。

「いえ」

浅川は首を振った。切り落とされた指の写真など見たいわけがない。倉田はすぐに手の動きを止めた。

「DNA鑑定は？」

「今、門脇妙子の部屋から見つかった毛髪と同じかどうか確認しているところだ。おそらくすぐに結果は出るだろう。いったい犯人は何を考えているんだと思う？」

「さあ。まだ何とも言えませんが」

「それじゃおまえに話した意味がないじゃないか。何か思うことはあつたろ？」

倉田は冗談っぽく言った。

「そりゃ少しくらい感じたことはありますよ。死体の顔を潰したり、体の一部を切り取る時は大抵の場合、被害者の身元を隠す時です。現に今回の事件でも指の指紋は削ぎ落とされている。けど、それなら何のためにネットにあんな書き込みをして、切り落とした指を送るなどということをしたのかわかりません。それにこういうケースの場合、身元を調べるためにDNA鑑定をすることくらい誰でも考えられると思いますが」

「知り合いの犯行だと思うか？」

「さあ……それもなんともいえないでしょう。ただ、わざわざ2階の窓から侵入しているのであれば、無差別に狙ったわけでもないでしょう。警察じゃどう見てるんですか？」

浅川は訊き返した。

「おまえと同じレベルさ。精神異常者による犯行という見方をしている者もいる」

「死亡推定時刻は？」

「さあ……」

「わからないんですか？」

「バカなこと訊くなよ。いくら科学捜査が進んでいても、たった指5本だけじゃさすがにそんなことまでわかるはずないだろ。しかもドライアイスできつちり冷凍されてるんだぞ」

「そっか……そうですね……考えてみれば、切断された指が送られてきただけで、被害者が死んでいるとも限らないわけですから」

「そういうことだ」

「それじゃ門脇妙子の家族のもとに脅迫のようなものはあつたんですか？」

「いや、まったくくない。そういう意味では身代金目的の誘拐事件とは考えにくいな。もし誘拐でもなく、生きている女の指を切断して

送りつけたとなると……なおさら異常者の可能性は高くなる」

「やつかいなパターンですね。そういえばどうして犯人は藤代光男の住所がわかったんです？」

「メールで住所を教えたださうだ」

「犯人にですか？」

「あの書き込みをした直後に住所を教えてくださいというメールが送られてきたんださうだ」

「それで住所を？」

藤代光男のあまりにも無防備な行為に浅川は呆れた。それとも最近の学生というのはこれほどまでに危機感がないのだろうか。

（あいつは大丈夫だろうな）

信頼はしていたが、それでもほんの少し美鈴の事が心配になる。

「ああ、まったく怖いもの知らずって言うか——」

「そのメールは？」

もし、メールが残っていたればそのヘッダ情報などから、どこから送られてきたものか判断することも出来る。

「すでに削除したさうだ」

「さうですか……それじゃどこから来たものかは判断つきませんね」「フリーメールだったらいい。どうせ、どこかのネットカフェから書き込んだもので、とても足がつくようなものじゃないだろう」

倉田はそう言ってテーブルの上にあった灰皿を左手にとると、タバコの火をもみ消した。

「——でしようね」

「今、パトロールを強化して市内を回らせてる。いずれ指だけじゃなく、他の体の部分も出てくるかもしれない。もちろん被害者が死んでいたら、の話だがな」

倉田は灰皿をテーブルの上に投げ出すように置いた。アルミ製の黒い灰皿はカラカラと小さな音を立ててからピタリと動きを止めた。「行方不明者は門脇妙子だけじゃないんでしょ？」

「そりゃさうだ。あちこちから家出娘だったり行方不明だったり、

届出はいくつも出てる。指の太さから見て女であることは間違いないだろうが、それがどの女の指なのかなんてさっぱりだ。だからこそ、他の部分の発見を急いでるんだ」

倉田は苛立ちを抑えるように指でテーブルをコツコツと叩いた。

「がんばってください」

「まるで他人事だな」

「そりゃ、僕は警察関係者じゃありませんから」

澄ました顔で浅川は言ってみせた。だが、頭のなかはどつぷりと事件のことが染み込んでいる。きっとこの事件が全て解決するまでは、このことが頭から離れなくなるだろうという予感がしていた。

「前回、聞くのを忘れたけど――」

と、徳永香織がソファに座ると浅川は口を開いた。「君の力のこと、ご両親は知っているのかな？」

「さあ……どうでしょう……力のことは誰にも話した事はありません。でも、ひよっとしたら母はある程度感じ取ってるかもしれない」

少し考えてから香織は答えた。

「それじゃ君のご両親が同じ力を持っているかどうか分からないわけだね」

「いえ、父や母が同じ力を持つてるなんてことはないと思います」

「どうしてそんなことが言えるの？」

その質問に香織は少しだけ視線を落として考えた後

「わかりません。けど、私にはわかるんです。父や母にこの力はありません」

「そう」

あえて浅川もそれ以上は訊こうとはしなかった。力を持つ香織がそう感じるのであれば、それは間違いないだろう。

「一つ訊いてもいいですか？」

「どんなこと？」

「先日、美鈴さんが話してた掲示板のことなんですが……今朝の新聞に出ていたのはあのことなんでしょうか？」

香織は表情を固くして訊いた。

昨日、美鈴の同級生である藤代光男の家に切り取られた指が送られてきた事件のことは今朝の新聞やニュースで大々的に取り上げられている。

「……ああ、そうだよ。昨日、僕の知り合いの刑事さんもそのことについてここに来て話していた」

「やはりその女性は殺されたんでしょうか」

「さあ……指を切り落とされたくらいでは人間は死なないけど……ひよっとして何かが見えたの？」

浅川は覗き込むように香織の瞳の奥を見た。

「え……ええ……」

香織は言葉を濁した。

「何が見えたの？」

「指を切り取られてバスルームに倒れている女性の姿です」

そして、香織は昨夜、自分が見たことを話し始めた。

ふと目が冷めた。

まだ夜明けは遠く、暗闇が部屋を満たしている。

ちらりと視線を動かして壁に掛かった時計を見る。まだ午前2時を過ぎたばかりだ。香織はそのままキョロキョロと瞳だけを動かし、部屋のなかを探った。そして、部屋のなかに何の気配もないことを確認するとゆっくりと身体を起こした。

（いない……）

いつもこんなふうに目が冷める時は、大抵、何かが身近に存在しているときだ。むしろ何も存在していないことのほうが珍しい。

もう一度部屋を見回し、何も存在していないことを確認してから、香織は再び毛布のなかに潜ろうとした。だが、次の瞬間――

ピチャン……

水の音が1階から聞こえてくる。

香織ははっとして再び起き上がった。

再びピチャンという音が響く。普通の水道の音なら2階にいる香織の部屋まで聞こえるはずがない。それはまるで香織のことを誘っているように聞こえた。

（誰かがいる）

大きく深呼吸をしてからベッドからするりと抜け出した。そして、パジャマ姿のまま電気をつけることなく、ゆっくりと壁を探りなが

ら部屋を出ると階段を降りて行く。

父も母もこの時間はぐっすりと眠っていることだろう。起こさないようにそつと足を忍ばせながら階段を降りるとバスルームへ足を向けた。

微かに水の音が聞こえている。だが、それが現実のものでないことは香織にはわかつている。

バスルームの扉を開け、浴室の曇りガラスをじっと見つめる。月明かりがわずかに照らしている。

シャワーの音が聞こえる。父や母のはずがないことはわかっている。

自分の身体が微かに震えているのが感じられる。

（なぜ？）

これまでも何度か同じような経験をしてきている。今更、なぜこんなに不安に感じるのだろうか。

香織は震える指で浴室のドアを開けた。そして、目の前の光景にはっとして一歩後ずさった。

暗い浴室の中、一人の若い女性が全裸の状態でその隅に蹲っている。シャワーの冷たい水を頭から浴びて、寒さに打ち震えている。

その女性に香織は見覚えがなかった。

香織はごくりと唾を飲むとそつと声を出した。

「誰……？」

香織が声を出すと女性は視線を香織へ向けた。怯え、窪んだその目。女性はまるで訴えかけるような目で香織を見ると、香織に向かって弱々しく右手を差し出した。その右手の先を見て、香織は背筋が寒くなるのを感じた。

その女性の指は全て指の付け根で切断されていたのだ。

それを見た瞬間、香織は浅川のところで見た掲示板のことを思い出した。

膝をかかえるもう一方の手も指は全て切断されている。そして、それは足の指も同様だった。浴室の床が血で真っ赤に染まっている。

あまりの恐怖に香織はクラリと気を失いそうになり、思わず壁にもたれかかった。

「あなたは……まさか……」

そう言った香織に向かって女性がわずかに口を動かした。

「た……す……け……」

まるで喉を潰されたようにその声はしわがれていた。濡れた髪が痩せた頬に張り付いている。

「あなたは――」

香織が話し掛けようとした瞬間、背後のほうでガタリと物音がした。

（お母さん？）

母親が起きてきたのだろうか、香織は振り返った。だが、その場の異変に香織ははっとした。

洗面所の鏡は一部割れ落ち、壁は薄黒く汚れ、そこから見える廊下の床の隅にも大きな埃の塊が落ちている。

ついさっきまで自分の家にいたはずなのに、いつの間にかそこはまったく見知らぬ他人の家に変わっている。

（ここは……どこなの？）

こんなことは初めてだった。

香織はうろたえた。ゆっくりと足音が近づいてくる。女性のほうを見るとその足音を聞いて、指のなくなった両腕で自分の身体を抱きしめ振るえている。

（犯人が……来る）

緊張感が全身を包み、香織は思わずぎゅっと目を閉じた。

「私が憶えているのはそこまでです。目を開けた時にはいつものように部屋のベッドの中でした」

香織は話し終わるとテーブルの上に置かれたオレンジジュースに初めて口をつけた。

「夢だったのかな？」

浅川の言葉に香織は一瞬だけ顔をしかめた。

「そう……ですね。夢と言われても仕方ないことでしょうね」

「君はそうは思っていないってことだね？」

「わかりません。けど、私にはただの夢とは思えないんです……事件のこと、あれから何かわかりましたか？」

香織は真剣な眼差しで浅川の顔を見つめた。

「昨日、知り合いの刑事さんがここに来て、今回の事件についてちよつと話をさせてもらったよ。けど、新聞やニュースで報道された通り、被害者の指が送られてきただけで、それ以上のことはまだわかっていない」

「……そうですか」

香織は少し残念そうに視線を落とした。

「今までに同じような経験をしたことは？」

「ありません。あんな感じのは初めてです」

「君は昨夜見た女性の顔を憶えてる？」

香織は小さく頷いた。

「ええ——うつすらとですけど」

「それじゃ——」

浅川は立ち上がると部屋の隅に置かれた棚から数枚の写真を持って戻ってきた。「このなかに君が見た女性はいるかな？ 最も似ている人を選んでくれる？」

そう言つて香織の前に5枚の写真を並べて見せた。そのなかには昨日、倉田が持つてきた門脇妙子の写真も含まれていた。門脇妙子がこの事件の被害者の可能性があるということは、まだ新聞やニュースでも報じられていない。だが、実際には今朝の時点で倉田から鑑定の結果、あの指が門脇妙子のものと判定したという連絡を受けている。他の4枚の写真は浅川の知り合いや、浅川が教師をやっていた学校の学生の写真で事件とはまったく無関係のものだ。

香織はその5枚の写真を食い入るように見つめている。浅川は自分の視線が門脇妙子の写真を無意識のうちに見てしまわないように

気をつけながら香織の様子を伺った。

香織は一枚一枚、その写真をじっと見つめていたが、やがて、そのなかの一枚を指差した。

「写真とは多少印象が違っていているけど、この人に間違いないと思います」

浅川は香織が指差した写真を見て息を飲んだ。それは紛れもなく昨日倉田が持ってきた門脇妙子のものだった。

門脇妙子 1 - 5

どう考えるべきなのだろう。

浅川は薄暗くなつた部屋のなかで、改めて門脇妙子の写真を見つめ思案を続けていた。

香織ははつきりと門脇妙子の写真を指差した。5分の1の確立。ただの偶然と言つてしまえばそれまでのことだ。それでも香織が見たものがただの夢でない可能性は高い。

実際、浅川は徳永香織の力について、かつての友人と同じような極めて優れた観察力を元にした幻想である可能性があるのではないかと考えていたところがある。

自分でも無意識のうちに、その場に残された状況を瞬時に読み取り、そこから真実を導き出す力。だが、それがあまりに無意識のうちにに行つてしまったため、それを補うために幻によつて答えを見つ不出す。

それが徳永香織の力の正体かもしれないと想像していた。

だが、その説で今日の話は説明出来るのだろうか。

（いったい僕は何を求めているんだ？）

香織が知っているのは、掲示板に書かれた言葉と新聞やニュースで報道されている限られた情報に過ぎない。それなのに、香織は自らの見た幻のなかで門脇妙子の顔を見たと言つている。

（香織は門脇妙子を知っている？）

まだその可能性は残っている。門脇妙子の写真を選んだことも、どこかで浅川の行動や写真の特徴から無意識のうちに、それが他の写真と違うことを感じ取つたのかもしれない。

だが、今ではその考えこそがあとづけの理屈に思えてくる。

（彼女は本物の能力者なのか？ 本当に死者の姿が見えるのか？）

浅川は右手を額に当てた。

もし彼女が本物の能力者で、昨夜見たものもただの幻ではないと

なれば事件を解く大きな手がかりになるのかもしれない。

その時、突然部屋に灯かりがついた。振り返ると美鈴が立っている。ちらりと時計に目を向けるとすでに午後6時を過ぎている。

「お兄ちゃん、何してるの？」

美鈴が声をあげた。

「なんだ……美鈴か」

「なんだ、じゃないわよ。どうしたのそんなぼんやりした顔して……今日、香織さんが来る日だったわよね。もう帰っちゃったの？」

「ああ、おまえずいぶん遅かったじゃないか」

「心配してくれてるの？ 私なら大丈夫よ」

美鈴はそう言いながら浅川の前座るとテーブルに置かれた写真を指差した。「この写真、何なの？」

「事件の被害者かもしれない人の写真」

「え？ 事件の被害者って……あの？」

「ああ。昨日、倉田さんが来て、行方不明になっている女性の写真を置いていった」

「これ、みんな行方不明者なの？」

「いや、行方不明なのはそのなかの一人。ほかは僕の知り合いの写真だよ。おまえ、どれが被害者の写真かわかるか？」

「えー、そんなのわかるわけじゃないの」

美鈴は口を尖らせた。

「そうだな。普通はわからないよな」

真剣な口ぶりの浅川に美鈴は不思議そうな顔をした。

「どうしたの？」

「彼女はそのなかから行方不明者を当ててみせたんだ」

「彼女って……香織さん？」

美鈴は訊き返した。

「ああ。彼女は事件の被害者の姿を夢で見たと言ってるんだ……いや……夢というよりもヴィジョンと言ったほうがいいんだろうな」「ヴィジョンか……それじゃ死んだ人の姿を見る力だけじゃなく、

そういうことをキャッチする力もあるってことなのね」

それほど美鈴は驚いてはいないようだった。以前から美鈴は香織にそういう力があると確信しているようだ。

「まだはつきりと言う事は出来ないけど、その可能性はあるのかも
しれないね」

「お兄ちゃん——」

美鈴が言いかけた時、部屋の電話が鳴り出した。浅川がすぐに立ち上がり電話に出た。

——浅川さん！

慌てたような香織の声が聞こえてきた。その声の雰囲気から何か起きたのだということが感じられる。

「どうしたの？」

——今……また……あの女の人の姿を見たんです。

香織の声が震えている。

「どこで？」

——今、部屋にいたら……急にまわりが公園になって……

「公園？　どこの公園かわかる？」

——すぐ近くに大きなドームのようなものが見えました。

「ドーム？　仙台スタジアム？」

——ええ

「それじゃ——」

——ええ……たぶん、あれは七北田公園だと思います。その花壇にあの女の人が……捨てられて……でも、その身体には首がないんです……

後は言葉にならなかった。

「わかった。香織さん、どこにいるの？」

——家に……

「それじゃ、そこにいなさい。僕が今から公園まで行って確かめてくる」

浅川が電話を切ると、その様子を見ていた美鈴が声をかけた。

「いったいどうしたの？ 香織さん？」

「ああ、彼女が再びヴィジョンを見たと言ってる。行方不明になっている門脇妙子が公園に捨てられているところだそうだ」

「それじゃ——」

「彼女の言っているのが本当だとすると、門脇妙子はすでに死んでいることになる」

首を切られた死体。想像しただけで背筋が寒くなる。

「どうするの？」

「行つて確かめてくるよ」

「警察へは？」

「確認した後で電話する。彼女の言葉を疑うつもりはないが、それだけで警察に連絡するわけにもいかないだろう」

「それじゃ私も——」

そう言つて美鈴が立ち上がろうとする。

「だめだ！ おまえはここに残れ。何かあればすぐ連絡する」

そう言つと浅川は美鈴を残し部屋を出た。

門脇妙子 1 - 6

マンションから七北田公園までは車でわずか5分程度の距離だ。泉中央駅からも近く、週末には家族連れで賑わうことが多い。

すでに日は沈み、公園内に人影は見えなくなっている。週末にはサッカーの試合観戦で大勢が集まる仙台スタジアムも、平日は照明も消され国道を走る車の音だけが聞こえている。

浅川は車を公園脇に止めると、懐中電灯を持って車を降りた。そして、懐中電灯で周囲を照らしながら1段低いところにある公園へ階段を降りていった。

（確か花壇のところだと言ったな）

公園内に花壇は3箇所ある。

まず浅川はまっすぐに公園中央にある花壇に近づいていった。知らず知らずのうちに緊張が全身を包んでいく。おそらく香織の言っていることに間違いはないだろう。そこには死体の一部があるのだ。香織には『死者の姿』を見る力だけでなく、『死』を一つのヴィジョンとして捉えることの出来る能力があるのかもしれない。

（死者からのメッセージというわけか）

懐中電灯を照らしながら花壇の中を捜していく。

（それにしても――）

こんなところを人に見られたら、むしろ浅川自身が不信人物と間違えられるかもしれない。そもそも門脇妙子の遺体を発見したとして、警察にどう説明すればいいのだろう。いくら倉田でも浅川がこんな時間に公園で死体を発見したといえ、何か事情があることくらいすぐに感づくだろう。

こんなことなら自分が公園で遺体を捜している間、美鈴に警察への言い訳でも考えておいてもらえばよかったと浅川は後悔した。美鈴ならきつとうまい言い訳を考えてくれることだろう。

だが、その後悔はすでに遅かった。その時、花の影に隠れた白い

物体が光のなかに浮かび上がった。

（これは――）

花壇の土の間からわずかに見えるその白い物体は紛れも無い人間の肌だ。浅川はハンカチを取り出すと、慎重深くそつとその物体にかけられた土を避けてみた。血の気を失った真つ白なマネキンのものような腕があらわになる。

浅川はそれを見て息を飲んだ。

その腕には指がなかった。

* * *

浅川の連絡を受け、警察がやってきたのはわずか5分後だった。初めにやってきたのはすぐ近所にある泉中央署の1台のパトカーで、中年の警察官の二人組みだった。

やってきた警察官に浅川は花壇のなかに遺体の一部が転がっていたことを説明した。警察官たちは、初め半信半疑の表情をしていたが、浅川の説明を聞きそれを確認するとすぐに応援を要請した。

それは正しい判断だ。とても警察官二人の判断で処理出来るようなものではない。

その後、すぐに何台ものパトカーが駆けつけ、やがて公園内は制服を着た警察官や鑑識の人間で溢れかえっていった。彼らは他の花壇のなかまでも搜索し、すぐに遺体の他の部分も見つけ出した。

最初にやってきた警察官の一人は浅川の隣に立ち、ずっと浅川が逃げないようにするかのように見張り続けている。

20分後、1台のパトカーが姿を現し、そこから倉田が姿を現した。

「なぜ、おまえがここにいるんだ？」

倉田は浅川を見つけると険しい表情でツカツカと歩み寄り、咎めるように言った。

「僕が第一発見者なんですよ」

浅川が肩を竦めて答えてみせると、倉田はますます驚いた表情に変った。

「なぜ？」

「なぜなんでしょうね」

「おい、ふざけてる場合じゃないぞ」

それは言われるまでもない。倉田が真剣である事はその表情を見るまでもなくわかってる。それでもどうにも倉田を納得させられるだけの言い訳は頭に浮かんでこない。

「ちよつと探し物をしにきたんですよ」

「探し物？」

「ええ、昼間、暇つぶしに散歩に来たんですけど、その時、御守りを落としてしまって」

我ながら下手な嘘だと思いつつも、浅川は飄々と答えた。

「御守りい？」

倉田は眉間に皺を寄せ、露骨に嫌な顔をした。「それで御守りではなく遺体を見つけたっていつのか？」

「そうです」

「で、御守りは見つかったのか？」

「いえ、ひよつとしたら落としたのはここじゃなかったのかも」

「おまえな……嘘をつくならもう少しマシな嘘をつけよ」

倉田は声をわずかに潜めて言った。

「ま、嘘と思われるなら仕方ないですが……」

ヘタな嘘と思われるのも仕方ない。いずれにしても浅川は香織のことだけは隠し通すつもりでいた。倉田が香織の存在を知ったところで、その力については浅川以上に信じる事が出来ないだろう。

そうこうしている間にも遺体は次々と公園から見つけ出されていく。若い刑事が倉田に駆け寄ってきた。

「倉田さん——」

「全部見つかったか？」

倉田が若い刑事に声をかけた。

「首以外は全て」

「首？ 首はないのか？」

「はい、それと厳密に言えば両手両足の指も切断されていて見つかりません」

「肝心なところは全て見つからないってことですね」

浅川が口を挟むと、若い刑事は余計な口を挟むなとばかりにジロリと浅川を睨みつけた。

「鑑定すればすぐにわかるさ」

そう言つて視線を浅川に向ける。「それにしても第一発見者がおまえだとはな……面倒なことに首つつこみやがつて」

もともと事件に協力しろと言つてきた事など忘れたように倉田は言つた。

「すみませんね」

「謝られても困るが……ま、いろいろと訊かれることは覚悟しておいてくれよ」

倉田はポンと浅川の肩を叩いた。

秋の訪れを告げる冷たい風に吹かれながら公園の木々の葉がサラサラと揺れている。

誰もいない公園は、その気温以上に肌寒く感じてくる。それでも藤枝美月はベンチに座り、黒いワンピースの上に羽織った黒いジャケットのポケットにそっと手を入れた。そのままの姿勢で、ぼんやりと秋の空を眺めた。

高い秋の空を白い雲がゆっくりと流れていく。

大学の友達は皆、就職活動で忙しく動き回っている。美月はすでに父が経営する建設会社に就職することが決められている。この就職難の中、就職活動に走り回っている友達には贅沢だと叱られるかもしれないが、まるで自分ひとり取り残されてしまったようで寂しく感じられる。

（まるで風に漂うだけのあの雲と同じ）

バッグにいれた携帯電話がメールの着信を告げた。

美月はすぐにバッグから携帯電話を取り出してメールを開いた。

メールは『桜』というメル友からのものだった。

『今、出勤する準備してるんだ。カスミちゃんは何してるの？』

『カスミ』というのは美月のハンドルネームだ。桜は市内のスーパーでホステスをやっているらしい。桜もまた美月と同じように今の自分を変えたいと、思い悩んでいる22歳の女性だった。

『どこか遠くに行きたい』それが桜の口癖だった。そして、それは美月にとっても同じ気持ちだった。

美月は少し考えた後でメールを打ち始めた。

『桜ちゃん、私、やっぱり東京に行こうと思ってる。ううん、出来ればこの日本を離れたい。そうすれば今とはまったく違う自分に会える気がする。私はもっと強い自分になりたいの。桜ちゃんも応援してね』

正直な気持ちだった。

父親である藤枝宗一郎はまだ45歳という若さながらも県議会議員として権勢を振るっている。国政という舞台に踊り出ることもそう遠いことではないだろう。子供の頃、そんな父親の存在は美月にとって誇らしいものだった。

——おまえは私に似てる。

いつもそう言って父に頭を撫でられるたびに嬉しく感じられたものだ。だが、成長するにしたがい、その父の力は娘である美月のことまでも支配しているように思えるようになってきた。

もし、父が今の地位になかったら……何度そんなことを考えたろう。

父にとって自分はただの人形と変わらない。そう感じた時、美月の心のなかに怒りの炎が点火された。

きつとこんなことを言ってみても他人からはただのワガママを言っているようにしか見えないだろう。それは自分でもよくわかっている。確かにお金に不自由したことはない。いつも使いきることなど出来ないほどの小遣いがヴィトンの財布のなか収められている。けれど、それは自らの自由と引き換えに無理やり押し付けられたものだ。

子供の頃から自由など与えてもらったことなどなかった。いつも父の許しなしでは遊びに行くことさえも出来なかった。誰とどこに行くのか、何をするのか。それを言わなければ家を外出することさえ許してもらえなかった。そして、1日の終わりには、今日一日のことを全て報告しなければいけなかった。子供の頃はそれが当たり前だと思っていた。中学生になって幼い頃に死んだと聞かされていた母が実は生きていることを知った。

——お母さんは、あなたのお父さんの束縛に耐えられなくて逃げ出したのよ。

母を知る遠縁の親戚がそつと教えてくれた。

あの頃からずっと、今の自分から逃げたいと思いつづけてきた。

これまでも2度、家を出ようとしたことがある。一度目は中学の時、母が静岡にいと聞き家を飛び出した。けれど、東京駅で追いかけてきた父の秘書の一人に捕まり家に帰らされた。二度目は高校を卒業する時、父に内緒で東京の大学を受験しようとした。その時も学校から父に連絡が入り、市内の大学を受験させられた。

そして、来年、父の会社に就職するということは今以上に束縛がきつくなることを意味している。

（このままじゃいけない）

この街から、いや、この世界全てから自分という存在を消してしまいたい、と美月は思った。

そつと左手の手首に残る傷を見つめる。中学の時、家に連れ戻された時に切った時の傷だ。その時痛めた神経のため、左手はあまり自由には動かない。いつそのこと、この傷とともに自分の存在を消し去ってしまいたい。

カサリと背後の草むらが揺れる音がして、美月ははっとして振り返った。大柄な男がすぐ背後に立っているのが見えた。

門脇妙子のバラバラ死体が見つかった以来、マスコミは『美人の殺人事件』という見出しとともに連日のように事件のことを報道している。

浅川はソファに身体を預け、ぼんやりとワイドショーの内容を眺めた。

——やはり動機は怨恨でしょうか？

白髪混じりの現場記者あがりのキャスターが元検事という肩書きのコメンテーターに問い掛ける。

——そうですね。怨恨の線は濃いでしょう。もちろんバラバラにすることで死体の処理をしやすくするという大きな目的があります。ただ、今回、私が気になっているのは死体に首がないということです。

と、いかつい顔をしたいかにも元検事といった男が答える。

——それはどういうことでしょう？

——警察の発表では、それ以前に送られてきた指も、指紋を削ぎ落とされていた。つまり犯人は被害者の身元を隠したかったんですね。

——けれど、今回はずいぶん早い段階で被害者の身元がわかりましたね。

——そうです。被害者の恋人からの行方不明の届が出てきたこともあり、その点は警察も迅速に動いたということでしょう。今は指紋だけではなく、DNA鑑定などで被害者の身元をある程度特定することが出来ますからね。犯人はそれを知らなかったのかもしれない。

——あまり警察の捜査には詳しくない……ということでしょうか？
——そうですね。事件そのものはあまりに残酷なものながら、どこか幼稚な面を感じますね。まさか少年犯罪ということはないとは思

います……

なんとも無難なコメントだ。

浅川はそこまで見ると、リモコンを手にしてTVのスイッチを切った。どの局の報道を観ても新たな情報はなく、過去に起こった事件を例にあげたワンパターンで内容のない報道ばかりだ。

先日の門脇妙子の遺体発見以来、どこで情報を仕入れてきたのか浅川のところにもマスコミの取材依頼が来るようになっていく。もちろん全て断ってはいるが、すっかり浅川も事件関係者となってしまうたことを実感させられていた。警察からもいつ再び事情聴取に呼ばれるかはわからない。

脳裏にあの時の指のない腕が蘇ってくる。生気を失った人形のようない白い腕。浅川にとってもバラバラ遺体などを見るのはあれが初めてのことだ。

さすがにあの瞬間は指が震えた。人を殺し、その遺体をバラバラに切り刻むなどということがそう簡単に出来るものなのだろうか。

（身元を隠す？）

本当にそうだろうか。もし、身元や犯行を隠すつもりなのだとすれば、なぜわざわざ掲示板にあのような書き込みをして、指を一般の人に送るなどということをしたのだろうか。まるで自分の犯罪を誇示しているようにも見える。だが、精神異常者がよくやる犯行声明とは意味が違っている。犯行声明ならばどこかに自分自身の存在を世の中に認めさせようとする意思が見え隠れしている。それなのにあの書き込みは単純に犯罪そのものを伝えようとしているに過ぎない。

バラバラに切断された遺体にしても、浅川が見つけなくてもすぐに他の人が見つけたらと思うほど簡単に埋められていたに過ぎない。そもそも本気で隠すつもりなら、もっと違う場所に埋めたはずだ。

（隠したい……？ それとも隠したくない……？）

その犯人の行動に浅川は矛盾を感じていた。

その時、部屋の電話が鳴り響いた。

また倉田からだろうか。

何か進展があったのかもしれない、と思いつつ浅川は急ぎ電話に出た。

「——はい」

だが、受話器から聞こえてきたのは思いもよらない相手からだった。

——浅川君か？

「え……ええ……」

一瞬、それが誰の声かわからずに浅川はうろたえた。

——久しぶりだね。柳田だよ。

「ああ——」

思わず言葉を失った。

——どうしたんだ？ 驚いているみたいだね。

「え……ええ、柳田さんから電話がくるとは思ってたので」
柳田秀三との付き合いは長いが、これまで一度として柳田から電話がかかってきたことはなかった。いつも倉田を間に挟んでの付き合いだった。

——君、教師を辞めたんだって？

「ええ、ちよつと思つところがありまして……」

そう答えてからシマツタと思つた。

——思つところ？ 具体的に何か考えていることがあるのか？

予想通り、浅川の答えを柳田は追及した。曖昧な答えをするといつも柳田はそこを突いてくる。

「それは——」

——ないんだろ？

「いえ……そんな……」

——別に隠さなくてもいい。『思つところがある』なんて言つ奴は大抵何も考えていないものだ。

柳田はズケズケと言つた。

「はあ」

柳田と話をしていると、言い返す氣力を失っていく。どんな議論をしても柳田には勝てる氣がしない。

——君、どうせ暇なんだろう？ 遊びに来なさい。

「はあ……それじゃいずれ時間を見て——」

——いずれ？ それじゃだめだ。今から来なさい。

「どうしたんです？ いったい」

——君に渡したいものがあるんだ。今日は診療を休みにしたから、今すぐに来なさい。

「そんな——」

——待ってるよ。

そう言つと一方的に柳田は電話を切つた。

空気が澄み、空が遠くに見える。

秋空という言葉がピッタリなほどの青い空が広がっている。

浅川は地下鉄長町駅の地下通路を外に出ると、大型ショッピングセンターへ向かう大通りにあるファーストフード店の小さな交差点を右に曲がった。

柳田秀三が所長をしている『柳田カウンセリングセンター』は地下鉄長町駅から歩いてほんの5分程度のところにある5階建ての小さな雑居ビルの1フロアにある。もともと祖父が小さな雑貨店をしていたところを譲り受け3年前に雑居ビルを建築し、その1フロアをビルオーナーである柳田修三が使っている。

浅川はまだ新しいその建物の前まで来ると、小さくため息をついた。まるで歯医者に行くのをためらっている小学生のようだ、と自分でも思う。

浅川は正面のドアを開け、中へ入るとエレベーターを使うことなくすぐ脇にある非常階段から柳田のいる2階へと向かった。

表のガラス戸にはカーテンが閉まっている。柳田が言ったようにまさか浅川のためにわざわざ休んだわけでもないだろう。

(いるのかな?)

浅川は正面のドアに近づくと脇に備えてあるインターホンのチャイムを押した。ほんの少ししてからスピーカーから声が聞こえてくる。

——はい。

「浅川です」

——おお、来たか。待ってなさい。

ガチャリと受話器を置く音が聞こえ、すぐに正面のガラス戸が開かれた。白衣を着たひよろりと背の高い頬のこけた男がにこやかに浅川を出迎える。

「ご無沙汰してます」

浅川は軽く頭を下げた。

「まったくだ」

分厚いメガネの奥で細い目が微かに笑っている。どうやらわりと機嫌が良いようだ。「さ、入りなさい」

浅川は柳田に促されるままに中に入った。センター内は待合室の診療室、奥に小さなリビングと簡単なキッチンだけが設置されていて、決して広いとはいえない。柳田は細い通路を通って、一番奥にあるリビングに浅川を案内した。

「今日は休みですか？」

「何を言ってるんだ？ 君のために休みにしたと言ったろう」

柳田は冗談なのか本気なのかわからないような言い方をした。「それより、君はどうして教師を辞めたんだ？」

「……別に深い理由はないんです」

「理由もないままに辞めたわけじゃないだろう。そんなことをするのは倉田ぐらいなものだ。あいつは本能のままに動く。君の場合はむしろ考え込みすぎて何も出来なくなるタイプだ」

柳田はその分厚いメガネの奥から心の中を覗き込もうとするように浅川を見た。だが、その柳田の言葉は的を獲ているかもしれない。「そうですね。でも、本当に深い理由はないんですよ。毎日毎日、学校に通って生徒たちや他の先生たちと接していく間に、だんだん教師って仕事が自分にむいていないように思えてきたんです」

「君、教師になって5年だよな」

「ええ」

「5年経ってやっと気づいたのか。君が高校教師などに向かないことは、僕も倉田もずっと以前からわかっている」

柳田はキツパリと言い切った。柳田は浅川より2歳年上で、まだギリギリ20代なのだが、それはまるでサトリを開いた仙人の言葉のように聞こえる。

「けど、教師という仕事が嫌いだったわけじゃありませんよ」

浅川は反論の意味をこめて言った。

「確かに君は教師という仕事には向いているかもしれない」

「え？ 向いてるといったり向いていないといったり……どっちですか？」

「僕は高校教師に向いていないと言ったんだ。教師に向いていないとは言っていない」

「どう違うんです？」

「高校教師ともなれば義務感だけで通ってくる生徒もいるし、大学受験だけを目的として通ってくる生徒もいる。純粋に学問を憶えた生徒などいたとしてもほんの一握りってことだよ。自分たちの高校時代を思い出してみればわかるだろう。そして、教師のほうだつて同じだ。毎日毎日、同じことの繰り返しでただ惰性で授業をしているに過ぎない。そんな授業を受けるくらいなら、自分で勉強したほうがどんなにいいかしかないからね」

「それは柳田さん自身のことでしょ？」

柳田が高校の頃、ほとんど登校しなかったということは、以前、同級生である倉田から聞いたことがある。

「それじゃ君は高校の授業が今の生活に生きているかね？」

「さあ……」

「ほら見たまえ。君が選んだ高校教師などその程度のものだったということだよ。どうせなら大学に残って教授の道を目指したほうが良かったと思うね」

「大学生でも純粋に学問のために通ってる生徒は少ないですよ」

「それでも高校教師よりはましだ」

柳田はフンと軽く笑った。「ところで、君は今後どうするつもりなんだ？」

「しばらくのんびり過ごしてみるつもりですよ」

「のんびり？ 殺人事件に首を突っ込むのがのんびり過ごすってことなのか？」

どうやら倉田が柳田に話したようだ。

「あれは単に倉田さんの相談相手をしているようなですよ」

「カウンセリングとでも？」

「そう……ですね」

「だったらいつそのこと仕事でそれをやってみたらいいじゃないか」

柳田はにんまりと笑って言った。

「仕事で？」

「そうだよ」

そう言うのと柳田は背後の机の上に手を伸ばして、小さな紙袋を取るとそれを浅川の前にポンと置いた。

「なんです？」

「今日来てもらったのはこれを君に渡すためだ。開けてみなさい」

そう言われて浅川は紙袋を開けて中を覗いた。小さな青い半透明のケースがあり、中に名刺が入っているのが見えた。

「名刺ですか？」

手をつ突っ込んでそれを取り出し、浅川は驚いた。

『柳田カウンセリングセンター 浅川圭吾』

それは紛れもなく浅川自身の名刺だった。

「柳田さん、これは？」

驚いて問い掛ける浅川に柳田は――

「君、心理学を専攻していたよね。なら、教師という経験もあることだし、カウンセリングくらいは出来るだろう？」

「まさかここで働けてことですか？」

「そんな驚くことではないだろ。どうせ暇なんだから一度経験してみたらどうだ？」

飄々とした口調で柳田は言った。

「冗談でしょ……」

すると柳田はすごく不愉快そうな顔をした。

「冗談？ バカ言っちゃいけないよ。私はいたってマジメだ」

「でも――」

「それとも君は私のところで働くのに何か不都合があるの？」

「そうじゃありません。けどねえ」

浅川は困ったように右手で頭を掻いた。

「心配しなくてもちゃんと君の給料くらいは払ってやる。それに君の治療も含めてやってあげてもいい」

「僕の治療？」

「君、相変わらずそんなことしているのか？」

柳田は浅川の右手首に撒かれた包帯を指差した。

「あ……これですか」

浅川は思わず右手を引つ込めた。

「大学の頃からずっとそんなものを撒いているそうじゃないか？」

何のマジナイかは知らないが、見たところライナスの毛布と一緒だろ？」

「ライナスの毛布？」

「スヌーピーだよ。まさか知らないのか？」

「いや、スヌーピーくらいは知ってますけど……」

「そのなかにいつでも毛布を片手に持つてる子供がいるだろ。子供の頃についた習性というのはなかなか治すのは難しいものだ。特に子供の頃に強烈な出来事があるとそれが頭のなかにこびりつき、それから逃れられなくなる。つまり一種の『スリコミ』のようなものだな」

「スリコミって……卵が孵ったときに一番最初に見たものを親と思ひ込むって……あれですか？」

「別に動物の話だけじゃない。実際には『スリコミ』なんていうのは、この世の中あちこちに転がってる。テレビコマーシャルだって一つの『スリコミ』だ。毎日のようにテレビをつけるたびに、商品を見せ付けられれば知らず知らずのうちにその商品が頭にくびりつき、スーパールに行った時にはふと手にとってしまう。そういや、知り合いのクライアントの話なんだが……自分の父親がある大

会社の社長の運転手をしていたんだが、その父親の姿を毎日見ているうちに自分自身もその立場でなければいけないと思いついてしまった。いつの間にかその社長の家の娘に対し、完全に主従関係を持つてしまった。その男にとってはどんな時もその娘の言葉こそが絶対的な意味を持つんだ。その娘から電話があればすぐにすつ飛んで行き、娘の言いなりになる。そこまでいくとなかなか治療も追いつかなくなる。何しろ治療の最中だろうと、娘からの連絡を受けて医者が止めるのも聞かずにすつ飛んでいくのだからね。君のその包帯も同じことが言えるんじゃないか？ いい加減、卒業する努力をすべきだと思うけどね」

「はあ……」

柳田の言葉に、浅川はどう答えていいかわからなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2121ba/>

メッセージ

2012年1月12日21時52分発行